



TITLE:

第4章 京都大学病院構内AH13区の 発掘調査

AUTHOR(S):

千葉, 豊; 長尾, 玲

CITATION:

千葉, 豊 ...[et al]. 第4章 京都大学病院構内AH13区の発掘調査. 京都大学
構内遺跡調査研究年報 2015, 2013: 157-202

ISSUE DATE:

2015-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/226468>

RIGHT:

第4章 京都大学病院構内A H13区の発掘調査

千葉 豊 長尾 玲

1 調査の概要

本調査区は、京都大学医学部附属病院の西構内、鴨川まで直線距離で200mの地点に位置し、聖護院川原町遺跡に含まれる（図版1－398）。ここに、総合先端基盤研究棟の新営が計画されたため、周辺地区での調査成果を勘案し、予定地全域の発掘調査を実施した。

調査区の西に隣接する379地点の調査では、近世の水路・道路・井戸・溝・小穴などを検出し、近世の土器・陶磁器類を主体として整理箱79箱を数える遺物が出土した。古図に描かれた人工の水路とともに、江戸時代の聖護院村と吉田村を画する道路が見つかり、近世以降の土地利用の変遷に関する重要な知見が得られている〔千葉・長尾2014〕。

今回の調査区は379地点の東側に隣接し、東側に延びていると想定できる水路や村境の道路が残存していることが予想された。こうした遺構の検出を主たる目的とし、鴨川にはほど近いこの地点の土地利用の変遷を明らかにすることを課題として調査をおこなった。調査期間は2013年5月30日～8月5日、調査面積は960㎡である。

発掘調査の結果、近世の水路・道路・溝・小穴などを検出し、近世の土器・陶磁器類を主体として整理箱75箱を数える遺物が出土した。

当初の予想どおり、西隣りの調査区で検出した水路および聖護院村と吉田村の村境（道路）を今回も認めることができた。水路は出土した遺物から、17世紀後半に構築され、幕末には機能しなくなっていたことを追認したほか、成立期の水路の幅は3m前後をはかる大規模なものであったが、砂の埋積とともに護岸の補強をおこなった結果、最終的に幅が半分にまで縮小したことが新たに判明した。

聖護院村と吉田村を画する東西道路には、水路と同時期に機能していたものと水路以前に遡るものがあり、また礫を混じえた一種の舗装をおこなったり、轍や側溝を伴っていたこと、水路の設置とともにその位置を少しずつ変化させていたことなどが明らかになった。

また、幕末期に比定できる整地土が見つかっており、これはこの時期に当地に設置された練兵場に関係するものとして注目しうる。このように、今回の調査では近世の土地利用の変遷を明らかにするうえで、重要な情報を得ることができた。

本章は第1・4・5節を千葉、第2・3節を長尾が執筆し、全体を千葉が調整した。

2 層 位

調査区全体には、厚さ50cm前後の表土（第1層）が広がり、X=999付近より南では、その下に整地土と思われる灰色砂礫（第2 a層）および礫混じり灰茶褐色土（第2 b層）がみられる。上半の2 a層はX=993以南に分布し、30cm前後の厚さをもつ。下半の2 b層はX=993以北では厚さ10cm前後、以南では20～40cm前後で、南へ行くほど厚く堆積している。さらに、X=994～998付近にかけてその下層に、南へ行くほど薄くなる灰白色砂礫（第2 c層）が分布する。第2層は幕末頃の整地土と想定しており、遺構の項で詳述する。

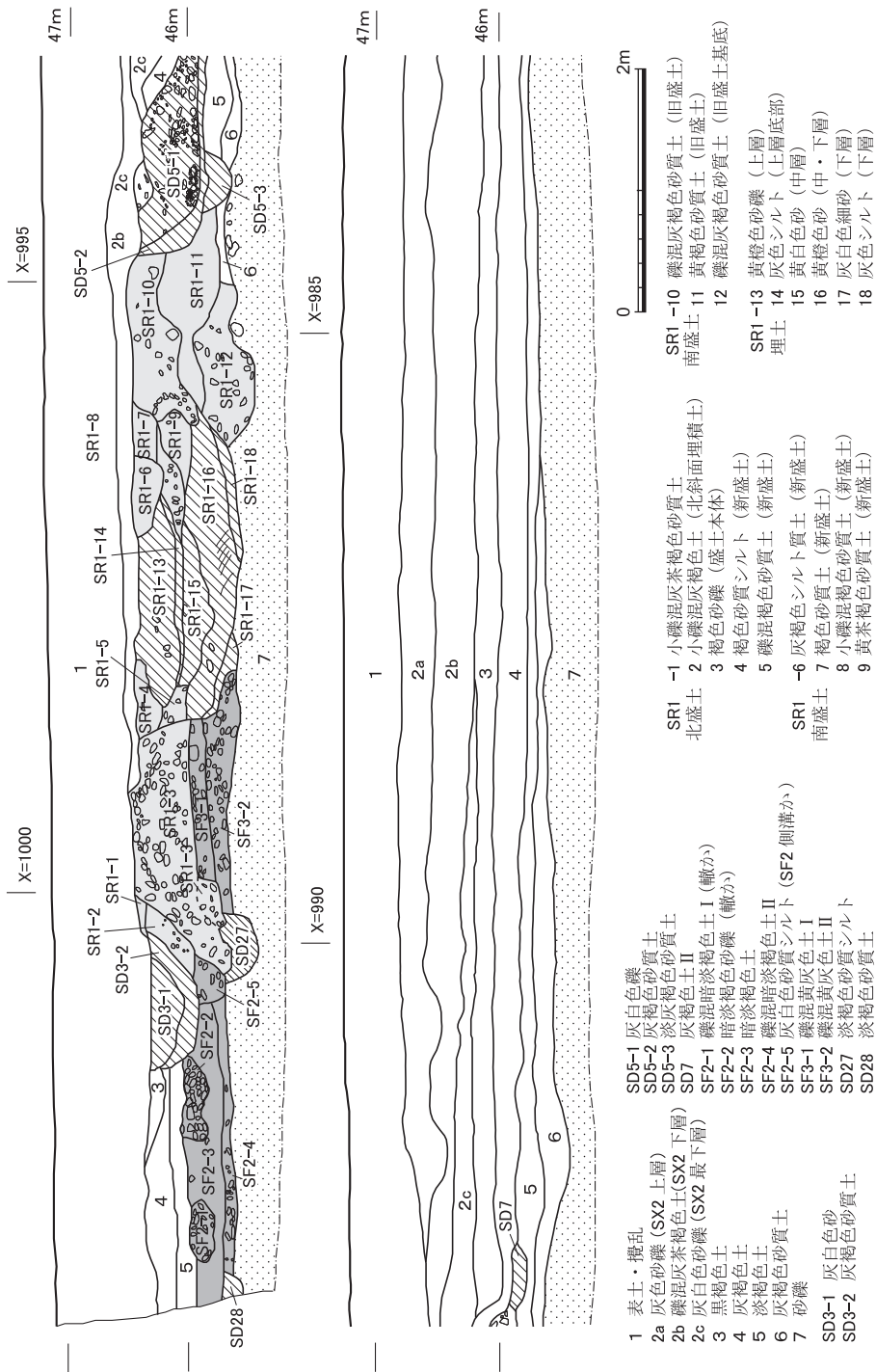
第3層の黒褐色土は厚さ15cm前後で、径1～数cmの黄色・黄橙色のブロックが入る。19世紀中頃を中心とした遺物を含む。第4層は、均質な灰褐色耕作土。厚さ20cm前後で、18世紀後半～19世紀前半の遺物を包含する。第5層は、黄褐色を帯びた淡褐色土。厚さ10cm前後で、ところどころ浅い溝状の落ち込みがみとめられた。量は多くないが、17世紀～18世紀前半の遺物が出土している。

第3・4・5層は、おもにX=994付近より南に分布し、この順序で埋土に含まれる遺物の量は少なくなる。これらの層はX=1001付近より北にも分布するが、調査区北西で北に向かってやや厚くなる第3層の黒褐色土は、調査区北東では部分的にしか確認されず、全体に黄色・黄橙色のブロックを含まないという違いが認められた。

第6層の灰褐色砂質土は厚さ20cm前後で、X=986～995付近にかけて帯状に分布する。自然の微弱な流れで形成されたものと推定する。第7層は高野川系流路による砂礫であり、この地一帯の基盤をなす堆積物である。砂礫中から、古代～中世の磨滅した遺物が若干量出土している。

3 遺 構

本調査区内は、隣接するA G13区、A H12区同様、中世以前においては高野川系流路の氾濫原であり、この時期の遺構は見られない。遺構の形成が見られるようになる近世以降を3時期に分けて記述する。Ⅰ期は、17世紀から18世紀前半までの時期。おもに淡褐色土を埋土とする遺構で、第7層の砂礫上面で検出した遺構である。Ⅱ期は、18世紀後半から19世紀前半までの時期。第6層の淡褐色土上面で検出した遺構で、灰褐色土を埋土とする遺構である。Ⅲ期は、灰褐色土上面検出で黒褐色土を埋土とする遺構と、黒褐色土より上部で検出された遺構で、幕末期の古段階と明治期以降の新段階に分ける。



調査区北辺には、東西方向の水路S R 1及びその南北盛土、東西道路があり、複雑に切り合っているが、おおむね上記の時期に対応させて記述する。

(1) I期の遺構（図版34・35、図81・82）

この時期は、大きく分けて調査区北辺の東西水路S R 1の構築以前と以後に分かれる。

道路S F 3 S R 1構築以前の遺構と確実に言えるのは、S R 1北盛土直下で検出された東西道路S F 3である。この道路は2枚の堅い面からなり、上層検出面の標高は45.9m前後、下層検出面の標高は45.8m前後である。上層の上面S F 3-1は、南側をS R 1に切れ、北側にはS R 1北盛土が落ち込むため、路面の幅は不明である。この部分を1回目として掘削した。

1回目の掘削後、幅1～1.5mで、直径5cm前後の礫を含む東西の石敷面S F 3-2を検出した。これより下部を下層とし、2回目として掘削した。2回目掘削後の標高は45.6m前後である。

S F 3-2の北側、砂礫上面で検出したS D 27は、S F 3-2の北側溝である。検出面の標高は45.7m、その部分での底の標高は45.5mであり、幅50～80cm、深さ20～30cmである。埋土は淡灰褐色の砂質土・シルトである。調査区東半では、軸が真東西よりも若干西南西に傾き、西半では西北西に傾く。西端付近では溝内に礫が埋積していた。

これらの遺構から出土した遺物は少なく、時期を明確に特定できないが、S F 3-1直上の北盛土内遺物の年代が1650～80年頃であり、それよりは古いことは確実である。

道路S F 2 S F 3の北側で検出された、S F 3と平行する道路。S F 2は上層と下層からなり、上層の上面S F 2-1の検出面は淡褐色土掘削後で標高は46.0mである。この面はあまり堅くないが、南寄りに、径5cm前後の礫がぎっしり詰まった轍状の東西石列が存在する。石列検出面の標高は46.0mで、その幅は50cm前後、厚さは20～30cmである。

北寄りにもやや礫の多い轍状の部分が存在するがあまり鮮明ではなく、調査区西寄りでは道路の上に埋積した黄褐色シルトの凹みへとつながる。凹みの検出面の標高は45.9m、底の標高は45.7mである。この黄褐色シルト上面でS F 2-1の北側溝と思われるS D 26が検出された。検出面の標高は45.9m、底の標高は45.8m、幅40～50cmで、埋土は褐色砂である。わずかに軸が西南西に傾いた東西方向の溝で、西端ではわずかに軸が西北西に傾く。東の方は調査区北壁で隠れて不明である。

S F 2-1の南側は後代の溝S D 3に破壊されているが、畔断面ではその南側溝らしき落ち込みがS D 3の下に見えた。

遺 構

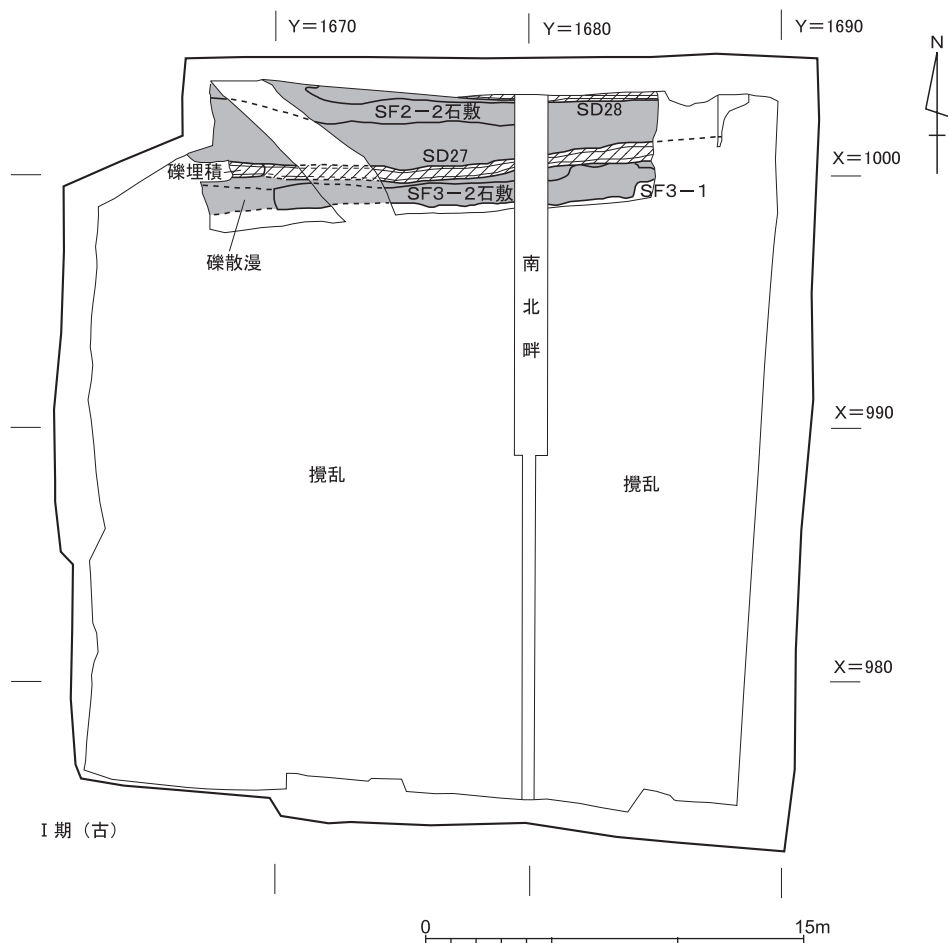


図81 I 期（古段階）の遺構 縮尺1/300

S F 2 上層の上半を 1 回目，下半を 2 回目として掘削した。いずれも遺物が多く，1680～1710年頃に編年される。この出土遺物から判断して，S F 2 上層は S F 3 より新しいと判断できる。

上層掘削後，北寄りで幅 1 m 弱位で径 5 cm 前後の礫を主体とする東西石敷を検出した。その上面である S F 2 - 2 検出面の標高は 45.7 m であり，これより下層を 3 回目として掘削した。3 回目掘削後の標高は 45.5～45.7 m である。S F 2 - 2 の北側溝と思われる S D 28 は，検出面の標高 45.7 m，底の標高 45.5 m で，北肩と西の方は調査区北壁に隠れて不明である。埋土は淡灰褐色の砂質土であり，遺物は少ない。S F 2 下層は年代比定のできる遺物に乏しく，S F 3 との先後関係も不明である。

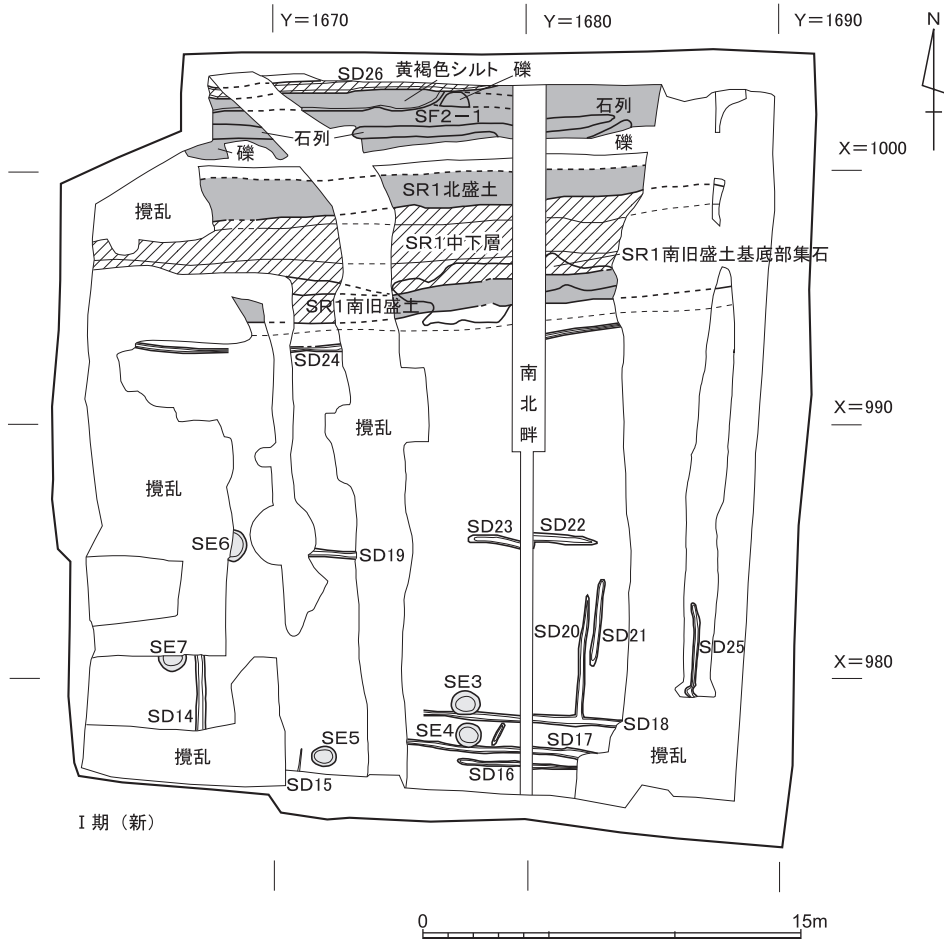


図82 I 期（新段階）の遺構 縮尺1/300

水路SR1 調査区北辺でみつかった東西方向に伸びる人工の水路である。水路を引く際、上記の道路のうちSF3を基盤としてその直上に北側の護岸（SR1北盛土）を構築している。この盛土は径10cm前後までの礫を多く含み、断面で層位を区別することが困難であったので、機械的に4回に分けて掘削した。このうち、4回目の掘削部分にあたる黄褐色の砂質土中から、1650～80年頃の遺物が出土しており、この時期が最初の盛土構築時期にあたる可以考虑することができる。この年代は、西に隣接する379地点の盛土基底部集石内の遺物の年代とも整合している〔千葉・長尾2014〕。

一方、水路の南側には、護岸構築の際に基礎となる道路が存在しない。そのため、人為的に地山の灰褐色砂質土および砂礫の一部を標高45.3～45.5m位まで掘り凹めたのち、径

10cmまでの礫を集石として配置し、同様の礫土で覆っている。その上に黄褐色砂質土を埋土とする初期の盛土を構築している。これはおおむね南旧盛土3～4回目として機械的に掘削した部分にあたり、1650～80年頃の遺物が出土している。379地点では、盛土下部として掘削した部分に相当する。

その上部は、径10cmまでの礫を多く含む褐色～灰褐色の砂質土が覆っているが、これは後に補修されたものである可能性もある。南旧盛土2～3回目として機械的に掘削した部分におおむね相当し、2011年度の調査区では盛土上部として掘削した部分である。ここまですべてを南旧盛土とし、これと初期の北盛土で囲まれた部分が、最初期のSR1であり、中層・下層として掘削した部分の一部にあたる。中層と下層は便宜的に分けて掘削したもので、明確な埋土の差はない。

水路の幅は2.5～3m前後、SR1底の標高は45.4～45.6mである。下層の底近くには、北側・南側に灰色シルト・砂質土が約10cm埋積し、水路中央の底直下は高野川の砂礫で、礫にマンガンが沈着し、黒色化している部分がある。灰色シルト・砂質土の上には黄白色、橙白色の砂が堆積しており、畔断面では南に落ちるラミナが見える。その上部では部分的に礫が入り、埋積が乱されている。中層・下層は遺物が少なく埋積の年代を決めることは困難である。なお、SR1の南には、第7層の砂礫の上に、自然によるものと思われる灰褐色砂質土が堆積している。高野川系流路が西へ移動した後も、自然の緩やかな流れが存在した箇所がある。こうした部分に水路を構築した可能性もある。

調査区の大部分では、SR1は、真東西より若干軸が西南西に傾いているが、下層の最下部のみ残っていた調査区西端では真東西になり、2011年度調査区のSR1の若干西北西の傾きに繋がると思われる。

以上記述した道路と水路の先後関係については、まず、SF3があり、その上にSR1盛土が構築されたことにより、道路が北側のSF2-1に移動したと考えるのがわかりやすい。ただし、379地点では、北盛土があったと推定される部分の北側に1620年～50年の遺物を多く含む路面または路盤が見つかった。SF2-2→SF3→SF2-1という変遷も想定されるが、SF2-2とSF3の先後関係は不明である。いずれにせよ本調査区内では、盛土構築後1680～1710年頃に路面は盛土北側に移動する。

溝SD14～25 SR1南旧盛土の南側、灰褐色砂質土および砂礫上面で検出した。淡褐色土を埋土とする浅い溝である。これらは全体に幅10～30cm、深さ10cm前後で、検出面の標高は45.6～45.8mの間である。方向は、東西または南北方向に近いものが多く、遺物

は少ない。これらは最初期の耕作に伴うものと考えられる。

落ち込みSE3～7 淡褐色土を埋土とする円形の落ち込み。これらは直径1m前後で、検出面の標高は45.6～45.7m、底の標高は45.3～45.6mの間であり、深さは10数cm～40cmである。これらは木杵の腐った野壺か、自然の円形落ち込みか判然としない。

(2) II期の遺構 (図版33, 図83)

水路SR1 この時期になると、まず、SR1南旧盛土の北への拡張がおこなわれる。SR1中層の埋積後、その上に新たに盛土が構築され、水路の幅が縮小される。この新しい盛土を南新盛土として掘削した。盛土上面の標高は畔際で45.6mである。全体的に旧盛土よりも礫が少なく、出土遺物は18世紀のものである。同様に北盛土も少し南に拡張され、SR1の幅は1.2～1.3mとなり、北盛土の幅が広がる。

道路SF1 SR1北盛土上で検出された道路。先述したSF2の上には、淡褐色土が埋積しており、おそらく東西道路が18世紀前半～中頃にSF2から北盛土上のSF1に移行したことに関係してSF2が廃絶したことによると推測できる。

側溝SD3 SF1の北側溝。2011年度調査区のSD9につながると思われる。SD3は径2～3mmの灰白色砂を主体とする上層と、灰褐色砂質土を主体とする下層に分かれるが、このうち淡褐色土上面で北肩を検出した下層がこの時期に機能していた溝である。SD3下層の検出面標高は北肩で46.1mで、底は45.7～45.9mで、北盛土際からの深さは30～40cmである。幅は70～100cmで、埋土に礫は少ない。南肩は、北盛土全体を1回掘り下げた上で、さらに盛土北端を少し下げた箇所検出した。

この時期以後のSD3とSR1が『山城国吉田村古図』（本学総合博物館蔵）で水色に塗られた水路であり、その間の道路が北盛土上の村境道路SF1である。『山城国吉田村古図』にはSR1の南盛土も緑色に塗られて描かれているが、聖護院村の領域になるためか実際の盛土幅より狭く描かれている。SD3北側の吉田村地区は、耕作地であったと思われる、淡褐色土上面で灰褐色土を埋土とする直径20cm前後、深さ10cm前後のピットが3つ検出されている。調査区北壁際の淡褐色土上面の標高は46.0～46.1mである。

溝SD5 SR1南旧盛土の南際、SR1に沿ってもうけられた溝。SD5は上層・下層・最下層からなる。いずれも西端より東端の標高がやや高い。このうち最下層は淡褐色土上面で検出され、幅20～40cmである。埋土は薄い灰褐色土であり、掘削後の標高は45.6～45.7mである。下層は礫をほとんど含まない灰褐色土を埋土とし掘削後の標高は45.8～45.9mである。その南肩は灰褐色土の包含層に削平されていて幅は不明であるが、

遺 構

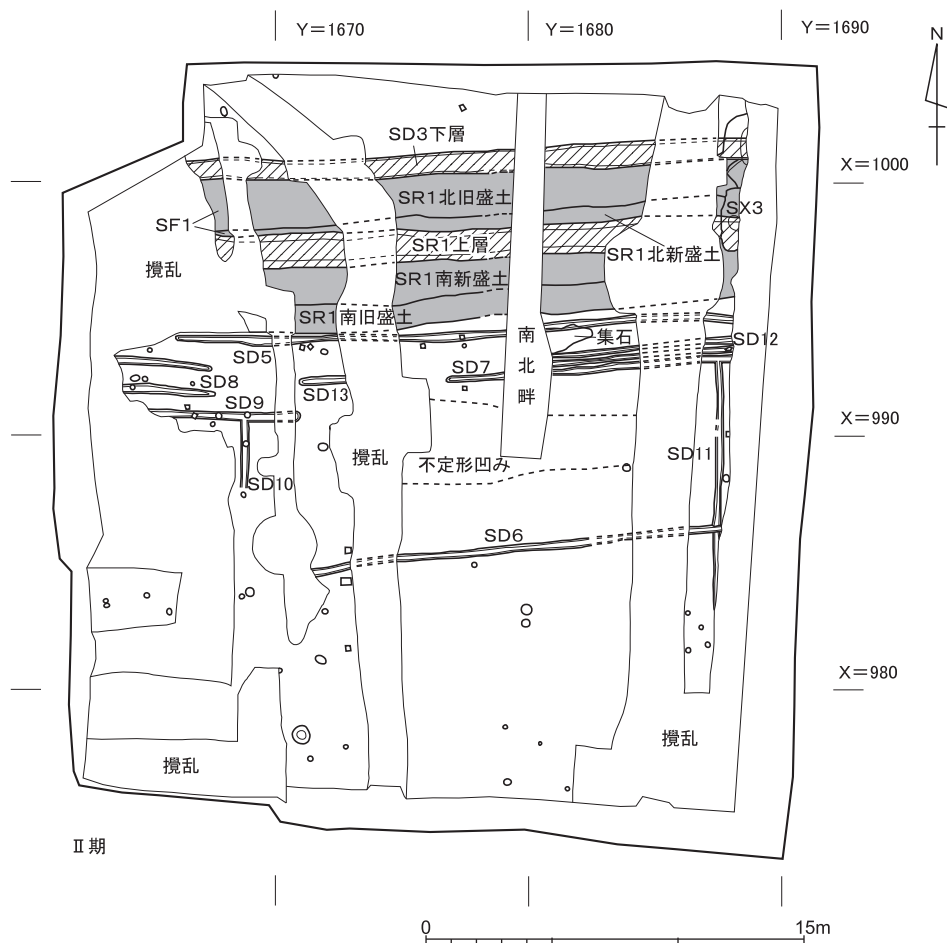


図83 II期の遺構 縮尺1/300

畔断面を見ると1.5m以上はあったと思われる。この下層または最下層が379地点のSD13につながると推定される。379地点では、赤褐色土上面で盛土南際の溝を検出したが、本調査区ではおそらく後代の削平により灰褐色土の下部に赤褐色土は認識できず、その上面での検出はできなかった。

SD5上層は、主に礫からなる。畔断面では、径5～10cmの礫を主に下部に含み、これは畔の東側でも集石として確認でき、人工的に配置した可能性がある。集石の上には径1～2cm位の砂利を含む部分があり、さらに上の部分は径1cm弱の砂利、灰白色砂を主体とし、ときにより大きな礫を含む。集石より上のこれらの埋積は流れにより形成された可能性がある。下層同様、南肩は削平されていて、溝の幅は不明であるが、下層と同じ位の幅

があったと思われる。掘削後の標高は46.0mである。

東西溝群 S D 5 のすぐ南でみつかった、S R 1 およびS D 5 と平行な溝群（S D 7 ～9・12・13）。淡褐色土上面で検出。これらはS R 1 の傾きに沿い、調査区東半で真東西よりやや西南西に軸が傾くが、西端ではやや西北西に傾く。379地点のS D 11・12・14・15と同様の、盛土際の耕作に関する東西溝と考えられる。

このほかに淡褐色土上面では、調査区中央で東西溝S D 6、東辺で南北溝S D 10、西辺で南北溝S D 11を検出した。これらも耕作に関するものと考えられる。これらの溝はいずれも灰褐色土を埋土とし、全体に幅20～40cmで、深さ10cm前後の浅い溝であり、遺物は少ない。検出面の標高は45.7～45.9mである。これら以外に、直径10～40cm、深さ数cm～20数cmの灰褐埋土の円形または方形ピットも散在するが、明確な並びは見られなかった。また、盛土際溝群の南1～2mでは、南北幅2～3mで灰褐色土を埋土とする不定形の浅い落ち込みが多数みつかった。植栽痕跡の可能性が考えられる。

S X 3 調査区北東で検出したS R 1 の南北に広がる不定形の遺構である。この遺構は、S R 1 中層に当たる部分の砂除去後に検出され、その検出面の標高は水路内で45.7m、北肩では46.2mである。底の標高は45.6mである。黒灰色の土と19世紀前半頃の遺物をやや多く含む。S X 3 北部の下では灰褐色及び褐色の土と黄白色砂を含む埋土により北盛土とS F 2・3が大幅に壊されている。またS X 3 南部付近では、南盛土も大きく破壊されていて、新旧盛土が区別できない。これらのことから考えて、S X 3 の埋土は、19世紀のS R 1 廃絶までの期間に水路とその南北盛土を補修した土である可能性がある。

(3) III期（古段階）の遺構（図版33・35、図84）

溝S D 3 この時期までにはS F 1 北側溝のS D 3 下層は埋まり、その北側には灰褐色土及び黒褐色土が埋積する。調査区北壁際での灰褐色土上面の標高は46.1～46.3m位である。灰褐色土上面は調査区北西で北へ向かってわずかに下がり、その上に黒褐色土が埋積しているが、畔断面を含む調査区北東ではS D 3 の北側で灰褐上面が凹んで、その上に黒褐色土が埋積している部分がある。これらの黒褐色土または灰褐色土上面でS D 3 上層が検出された。検出面の標高は46.4mで、その場所での底の標高は46.1mである。全体に、深さ20～30cm、幅80～110cm位である。この溝もまもなく灰白色砂で埋まり、機能しなくなる。埋土内の遺物はあまり多くない。

水路S R 1 S F 1 南のS R 1 は、19世紀半ばの洪水により一気に廃絶される。このS R 1 の最終的な埋積を含む最終段階の水路の埋土をS R 1 上層として掘削した。S R 1

遺 構

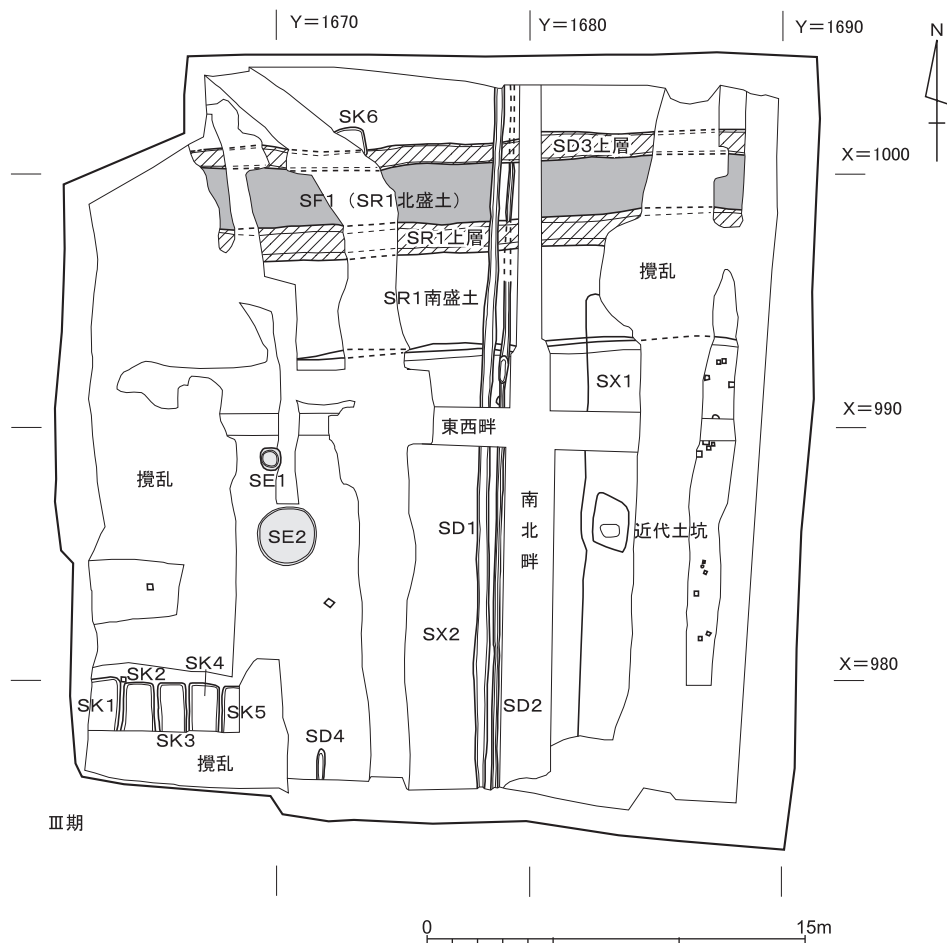


図84 Ⅲ期の遺構 縮尺1/300

上層の大半には、径5cm大の礫を主体とした礫混じりの黄橙白色砂が埋積し、その上半20cm位の厚さの部分に大量の遺物を含む。下半は比較的遺物が少ない。おおむね2011年度調査区でSR1上部として掘削した部分がこの上半に、SR1下部として掘削した部分が下半にあたる。畔断面で見ると、この砂礫は、南新盛土と北盛土の追加部分の、土質が変化するそれぞれ中間を挟っており、洪水の激しさをうかがわせる。この砂礫を除去したSR1上層の底付近に、灰色～灰褐色のシルトが厚さ5cmほど埋積している。上層の砂検出面の標高は46.4m、底の標高は46.0m位である。SR1上層とSD3上層の廃絶の先後関係はわからないが、埋積状況が異なり、同時に廃絶したものではなさそうである。

SD3・SR1が機能していた間に盛土の南には黒褐色土が埋積したと考えられる。黒

褐色土の埋土中には、1～数cmの黄色または黄橙色の小ブロックが入る部分が多く、埋土中の遺物は灰褐色土よりも多い。調査区の中央では黒褐色土を埋土とする遺構はまったく見られず、東辺と西辺にわずかな遺構が見られる程度である。このうち、調査区南端のSD 4は、深さ10数cm、幅20～30cmの南北溝であり、検出面の標高は46.0m、底の標高は45.9mである。

整地土SX 2 SX 2は、調査区中央付近から南にかけて黒褐色土の上に埋積した、幕末の遺物を含む分厚い土混じりの砂礫（第2層）である。表土除去後に検出し、その検出面の標高は46.8m、黒褐色土上面での底の標高は46.1mである。分布範囲は、調査区東半と西半のそれぞれ南北を貫く攪乱の間で、SR 1北盛土付近より南である。

SX 2は、上層、下層、最下層に分かれる。上層の灰色砂礫（第2 a層）は、SR 1南盛土の上付近から南にかけて分布する。約20～30cmの厚さで、径2～10cm位の礫を多く含む。下層（第2 b層）は、SR 1北盛土から南にかけて分布し、5cm大位までの礫混じりの灰茶褐色土を埋土とする。最下層（第2 c層）は、おもに灰白色の砂利層で、SD 5上層の上に部分的に見え、おもにSR 1南旧盛土際から南に分布する。厚さは旧盛土際で20数cmで、南へ行くほど薄くなり、X=990ラインの少し南で消滅する。最下層の砂はSR 1上層の砂と類似しており、SR 1の洪水がその南盛土を越えて溢れ出て埋積した自然堆積と推定できる。一方、上層・下層は、砂礫や土の埋積状況が不均一で自然によるものとは考えられず、洪水の後にこの付近全体をSR 1盛土と同じ位の高さにするための整地土であると推定できる。SX 2の最上部付近からは使用済みの銃弾が出土しており、埋土に明治期以降の遺物を含まないことなどから判断して、幕末にこの地に設置された練兵場に関係する整地土の可能性が高い、と理解している。

溝SD 1・SD 2 南北畔西のSX 2最下層及び黒褐色土上面で検出した、底がコの字状になるしっかりした南北溝である。真南北よりもわずかに軸が北北東に傾き、出土遺物は幕末である。東西畔の断面で見るとその埋土はSX 2下層と同様であり、これらの溝は、SR 1及びその南北盛土を切り、本調査区を南北に縦断する。このことから、SR 1廃絶後に作られ比較的短期間で埋められた溝であると考えられ、幕末～明治初期の練兵場との関係が推測される。

SD 1は幅40～50cm、SD 2は幅20～30cmである。SD 1検出面の標高は、南盛土上面で46.5m、その部分での底の標高は45.9mであり、調査区南端での底の標高とあまりかわらない。調査区北端での底の標高は46.0mである。

S D 2 検出面の標高は南盛土上面で46.4m, その部分での底の標高は46.1m, 調査区南端では45.9mである。位置的にS D 1は, 2011年度調査区のS D 24, 2008年度調査区のS D 14につながり, かなり長い南北溝になると推定される。

集石S X 1 南北畔より東でS X 2の上層を切り, 南北に長く分布する集石である。多くの幕末の遺物を間に含み, その北半は拳大の礫と大きめの遺物, 南半はそれよりもやや小さい礫・遺物と土からなる。東端は攪乱に切られており東西幅は不明であるが, 1.5～2m以上である。北端は不鮮明であるが, S R 1より手前までであり, 南端は攪乱に切られて不明である。検出面は表土除去後であり, 検出面の標高は47.0m, 厚さは約40cmである。これも整地に関わる集石である可能性がある。

(4) III期(新段階)の遺構(図版33・35, 図84・85)

井戸S E 1 調査区西半の黒褐色土上面で掘方を検出した瓦組の井戸。掘方検出面の標高は, 46.0mである。井筒は直径70cmで, 縦30cm弱, 横25cm前後, 厚さ2～3cmの井戸瓦を段ごとに互い違いに組み合わせて構築されていた。下から3段目までは完全な形で残存し, 4段目の瓦の下部が南西の一部で残存していた。井筒の下に木桶は現存していなかったが, 水溜があり, 円形の木桶が存在していたことが推定される。底の標高は44.4mである。埋土には上部から下部までレンガが多量に含まれており, 廃絶は明治以降であるが, 掘方には遺物が含まれず, その製作年代は不明である。

野壺S E 2 S E 1の南にある黒褐色土上面で検出した直径2.2m位の漆喰の野壺であり, 漆喰の上部は破壊されていた。漆喰の厚さは底で5cm位, 側面で10cm前後であり, 底部までレンガが埋積していた。掘方は見つからなかったため製作年代は不明である。検

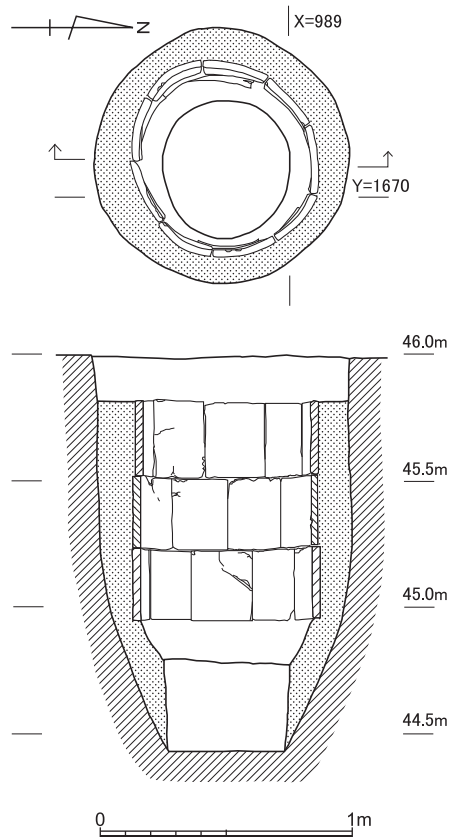


図85 井戸S E 1 縮尺1/30

出面の標高は46.1m、底部の標高は漆喰の上で45.6mである。S E 1・2は対になって使用されたものかもしれない。

方形土坑 S K 1～5 調査区南西隅で確認された、礫混じりの黒褐色土を埋土とする方形土坑の並び。これらの土坑は灰褐色土上面で検出され、検出面の標高は、45.9m、底の標高は45.6～45.7mであり、深さ20～30cm、東西1 m強、南北2 m以上である。南端は攪乱で切られている。S K 2からはレンガ、ガラスが、S K 4・5からは近代の陶磁器が出土しており、明治以降に埋められた遺構と考えられる。これらの土坑群の上の黒褐色土からは1厘銭が出土しており、実際の掘り込み面は認識できた検出面よりも高かった可能性がある。北肩は、真東西よりもやや西北西に軸が傾いて並んでいる。位置的に379地点のS K 33～39と並ぶ可能性が高い。

方形土坑 S K 6 調査区北西で検出された、黒褐色土を埋土とする東西幅1.2m以上、南北幅1.1m以上の方形土坑。検出面はS D 3下層上面で、その標高は46.1mであり、底の標高は45.8mである。明確な近代以降の遺物は見つかっておらず、並びの土坑も確認されていないため、上記の土坑群と同時期のものかは不明である。本調査区内ではこれらの土坑より東では類似の方形土坑は見つかっていない。

近代土坑 調査区南東寄りの集石S X 1上面で検出した一辺1～2 mの土坑。近代の陶磁器を大量に含む。検出面の標高は46.9m。この土坑はレンガ・ガラスを含むが、大学病院関係の遺物は含まず、大学以前の廃棄土坑と推定される。底の標高は45.5mで、第7層の砂礫にまで達している。

4 出土遺物

S F 2出土遺物（Ⅲ1～Ⅲ127） S F 2は3回に分けて掘削し、遺物を取り上げをおこなったが、3回目の掘削では遺物は僅少で、年代比定のできるものはなかった。ここに掲げた遺物は、1回目と2回目の掘削で出土した遺物、すなわちS F 2上層に関するものである。

Ⅲ1～Ⅲ84は淡橙～橙褐色を呈する土師器皿。Ⅲ1～Ⅲ4は見込みに圈線をもたないタイプで、口径6.5～8.5cm。Ⅲ5～Ⅲ84は見込みに圈線をもつタイプ。圈線は、凹線状を呈して不明瞭になるものもあるが、おおむね境界の明瞭な凹線として引かれているものが多い。口径は小は9.5cm（Ⅲ5）、大は16.5cmをはかるが、12～14cm台のものが主体を占めている。Ⅲ59・Ⅲ79は口縁端部にすずが付着する。これらの土師器は、17世紀後葉～18世紀

出土遺物

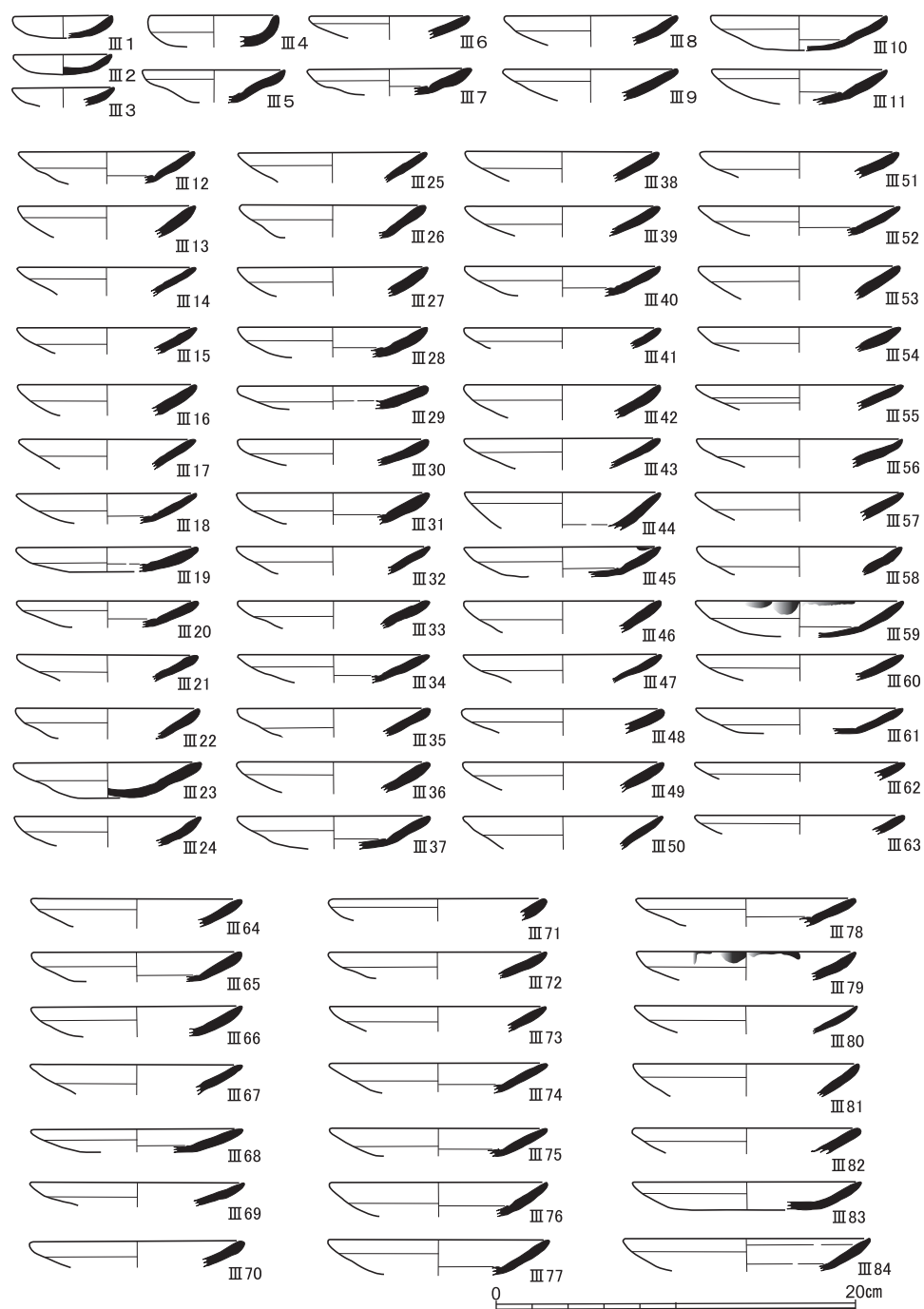


図86 S F 2 出土遺物(1) (Ⅲ 1 ~ Ⅲ 84 土師器)

京都大学病院構内A H13区の発掘調査

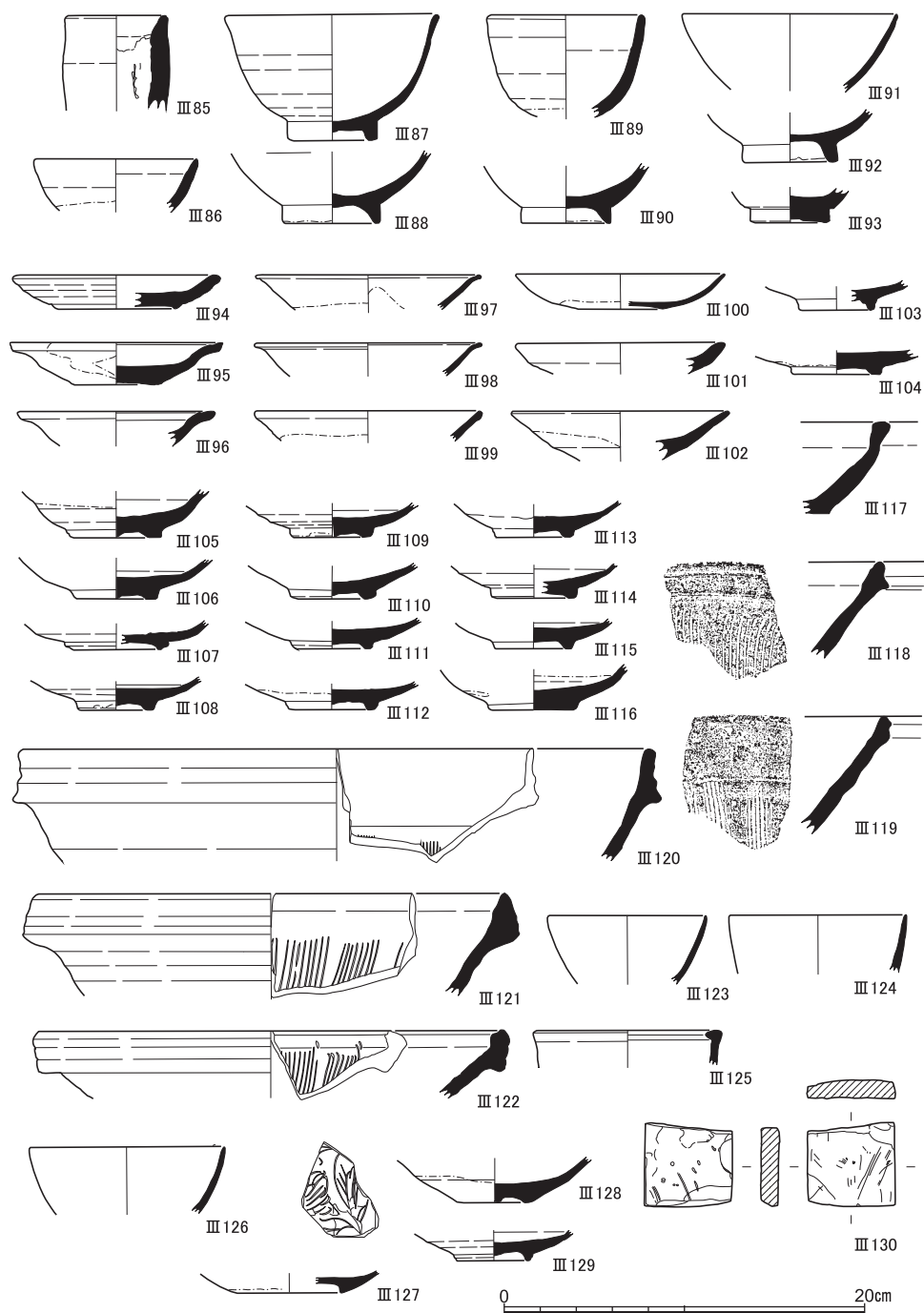


図87 S F 2 出土遺物(2) (Ⅲ85土師器, Ⅲ86～Ⅲ124陶器, Ⅲ125～Ⅲ127磁器), S D 26出土遺物 (Ⅲ128・Ⅲ129陶器, Ⅲ130砥石)

初頭ごろに編年できる。

Ⅲ85は土師器焼塩壺の身。口径5.4cm。粘土板を巻き付けて成形した痕跡が内面に残る。外面から口縁端部内面までは撫でて仕上げている。

Ⅲ86～Ⅲ93は陶器碗。Ⅲ87は全面に施釉し高台に目跡を残す。Ⅲ88・Ⅲ90・Ⅲ92は高台畳付のみ無釉としている。Ⅲ89は高台回りの除いて、内外面に鉄釉を施している。Ⅲ93は天目碗の底部。

Ⅲ94～Ⅲ116は陶器皿。Ⅲ95は底部を回転糸切りし、見込みと底部に砂目の目跡を残している。Ⅲ100は底部外面を除いて、鉄釉を施している。Ⅲ102～Ⅲ116は唐津焼であり、見込みや高台に砂目の目跡を残している。

Ⅲ117は無釉焼締陶器の鉢。Ⅲ118～Ⅲ122は陶器すり鉢。Ⅲ123・Ⅲ124は磁器染付の碗。Ⅲ125は青磁香炉。Ⅲ126は白磁碗。Ⅲ127は白磁皿で、見込みに、線彫りによる草花文をもつ。

S D 26出土遺物(Ⅲ128～Ⅲ130) Ⅲ128・Ⅲ129は陶器碗ないしは皿。Ⅲ128は見込み、Ⅲ129は見込みおよび高台に砂目をもつ唐津焼。Ⅲ130は砥石。

S F 3 出土遺物(Ⅲ131～Ⅲ140) Ⅲ131・Ⅲ132は土師器皿で、Ⅲ132は見込みに、体部側の境が不明瞭な圈線がめぐっている。Ⅲ133は天目碗の底部。Ⅲ134～Ⅲ136は陶器碗で、Ⅲ135・Ⅲ136は唐津焼。Ⅲ137は内面無釉、外面に鉄釉を施す陶器で、高台の3カ所に半円形のくり込みをいれている。Ⅲ138は陶器乗燭。底部外面を除いて鉛釉を施釉する。Ⅲ139は陶器瓶の口縁部。Ⅲ140は陶器皿。見込みに鉄釉で文様を施す唐津焼。

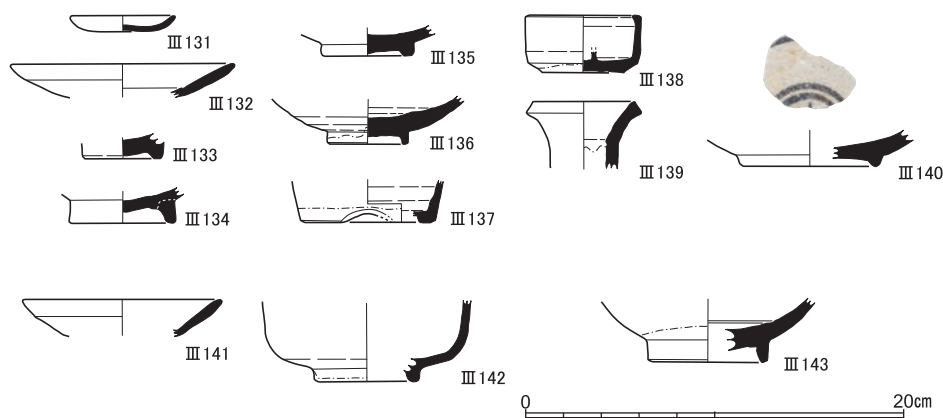


図88 S F 3 出土遺物 (Ⅲ131・Ⅲ132土師器, Ⅲ133～Ⅲ140陶器), S E 6 出土遺物 (Ⅲ141土師器, Ⅲ142陶器), S E 7 出土遺物 (Ⅲ143白磁)

S E 6 出土遺物（Ⅲ141・Ⅲ142） Ⅲ141は土師器皿。内面底部と体部の境が強い撫でによって凹線状を呈している。Ⅲ142は陶器椀か。

S E 7 出土遺物（Ⅲ143） Ⅲ143は白磁碗の底部。見込みに圈線がめぐる。

S R 1 北盛土出土遺物（Ⅲ144～Ⅲ182） S R 1 の北側の盛土（護岸）は、礫土からなり層位の区別が困難であったので、機械的に4回に分けて掘削し遺物を取り上げた。また、肩部の堆積は北肩盛土（新盛土）として区別した。ここでは、上記の北盛土から出土した遺物を一括して提示するが、4回目の掘削にあたる最下部からは17世紀後半に比定できる遺物が出土し、1回目・2回目あるいは新盛土から19世紀前半代に下る遺物が出土しているので、出土層位を記しつつ解説する。

Ⅲ144・Ⅲ145は土師器皿。Ⅲ144は見込みに凹線状の圈線がめぐっている。Ⅲ145は体部がやや外反気味に立ち上がり、圈線部分で欠損している。Ⅲ144は掘削4回目、Ⅲ145は3回目の出土。

Ⅲ146～Ⅲ151は陶器の椀ないし皿。Ⅲ146～Ⅲ150は唐津焼で、Ⅲ146は見込みに胎土目、それ以外は砂目の痕跡を残す。Ⅲ146・Ⅲ148・Ⅲ151は掘削4回目、Ⅲ147・Ⅲ150は3回目出土。

Ⅲ152～Ⅲ154は陶器灯明受皿。いずれも掘削1回目の出土。Ⅲ155～Ⅲ160は陶器蓋。Ⅲ155はいっちゃん描きで施文する。Ⅲ157は外面白化粧の後に、鉄釉で文様を描く。Ⅲ155が掘削1回目、Ⅲ156・Ⅲ157・Ⅲ160が2回目、Ⅲ159が3回目の出土。Ⅲ158は北肩盛土（新盛土）出土である。

Ⅲ161～Ⅲ164は陶器すり鉢。Ⅲ161は北肩盛土、Ⅲ162は3回目、Ⅲ163・Ⅲ164は4回目出土。Ⅲ165・Ⅲ166は陶器鉢。Ⅲ165は灰釉、Ⅲ166は黒釉を施す。ともに3回目出土。

Ⅲ167～Ⅲ178は磁器染付。Ⅲ167～176は椀。Ⅲ171は線描きによる文様をもつ。焼継している。Ⅲ172はコンニャク判。Ⅲ174は広東椀。Ⅲ175は底裏に「福」、見込みに「□明成□年製」の銘をもつ。Ⅲ167・Ⅲ168は4回目、Ⅲ169・Ⅲ172・Ⅲ173・Ⅲ176は1回目、Ⅲ170・Ⅲ171・Ⅲ174は2回目、Ⅲ175は3回目出土。Ⅲ177は皿。見込みに、山水楼阁文を描く。2回目出土。Ⅲ178は蓋。1回目出土。

Ⅲ179は白磁椀。2回目出土。Ⅲ180・Ⅲ181は青磁椀の底部。Ⅲ180は2回目、Ⅲ181は4回目出土。Ⅲ182は砥石。北肩盛土出土。

S R 1 南旧盛土出土遺物（Ⅲ183～Ⅲ199） S R 1 南側の盛土は、旧盛土と新盛土が区別される。新盛土は、S R 1 中層が埋積したのち、新たに構築された盛土である。旧盛

出土遺物

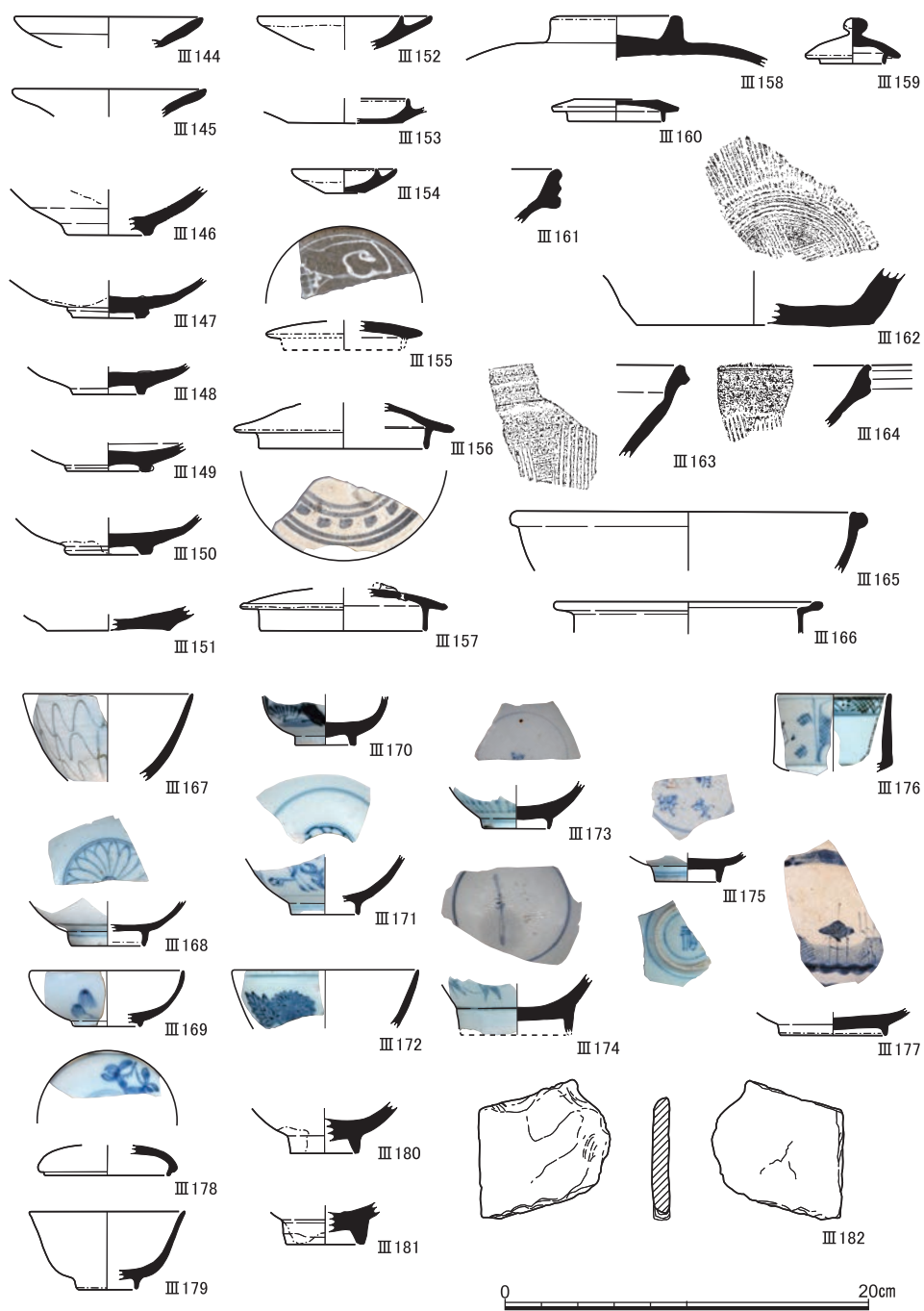


图89 S R 1 北盛土出土遺物 (Ⅲ144·Ⅲ145土師器, Ⅲ146~Ⅲ166陶器, Ⅲ167~Ⅲ181磁器, Ⅲ182砥石)

土は、初期の盛土で4回に分けて掘削し、さらに最下部は基底部として別に遺物を取り上げている。上部の盛土（1～3回目）は後の補修の可能性もあるので、出土層位を列記しつつ解説する。

Ⅲ183～Ⅲ185は土師器皿。Ⅲ185は見込みに凹線状の圈線がめぐる。Ⅲ184は口縁端部に煤が付着する。Ⅲ183・Ⅲ184が3回目、Ⅲ185が4回目出土。

Ⅲ186は陶器天目椀。3回目出土。Ⅲ187・Ⅲ188は陶器の椀ないし皿。Ⅲ187は見込みを蛇の目釉はぎしている。Ⅲ188は唐津焼で、見込みと高台に砂目の目跡をもつ。いずれも、3回目出土。Ⅲ189は陶器灯明皿。1回目出土。

Ⅲ190～Ⅲ192は、陶器すり鉢。Ⅲ190は基底部、Ⅲ191は4回目、Ⅲ192は2回目出土。Ⅲ193は陶器壺。2回目出土。Ⅲ194は陶器水指。口径18cm、体部の2カ所に段をもつ。口縁内面に蓋受けの突出がつく。口辺部には鉄絵を施している。3回目出土。Ⅲ195は陶器壺。口縁部が内外に肥厚し1条の沈線がめぐっている。外面に鉄釉を施す。基底部出土。

Ⅲ196は舶載の磁器染付。基底部出土。Ⅲ197は磁器染付皿。3回目出土。Ⅲ198は白磁椀。2回目出土。Ⅲ199は青磁皿。3回目出土。

S R 1 南新盛土出土遺物（Ⅲ200～Ⅲ218） Ⅲ200は見込みに圈線をもつ土師器皿。Ⅲ201は土師器焼塩壺の身。Ⅲ202は土師器焙烙。口縁部が内湾する形態。体部は外型作りで、口縁部から内面にかけて撫で調整を施す。

Ⅲ203～Ⅲ205は陶器椀。Ⅲ203・Ⅲ205は唐津焼で、Ⅲ203は白化粧土による刷毛目文を内外面に施文している。Ⅲ207～Ⅲ209は陶器灯明受皿。Ⅲ210は陶器蓋。Ⅲ211は陶器すり鉢。Ⅲ212は陶器鉢。飴釉を内外面に施している。

Ⅲ213～Ⅲ217は磁器染付椀。Ⅲ213の文様はコンニャク判による。Ⅲ216・Ⅲ217はいわゆる、くらわんか椀である。Ⅲ216は青磁香炉。脚がつくが、接地しない。

S R 1 埋土出土遺物（Ⅲ219～Ⅲ304） S R 1の埋土から出土した遺物は、おもに上・中・下の3層に区分して取り上げた。これら以外に、S R 1埋土とS R 1盛土（護岸）との境界付近から出土し、帰属がはっきりしないものについて、「肩際」として取り上げた遺物が若干量存在する。下層出土遺物には、17世紀にまで遡るものが認められるが、上層から出土した遺物は19世紀中葉頃のもの为主体を占めている。ただし、明治期に下る遺物は含まない。

Ⅲ219～Ⅲ226はS R 1下層から出土した遺物。Ⅲ219は土師器小皿。Ⅲ220は陶器は椀。Ⅲ221は焼締陶器。Ⅲ222は陶器すり鉢。Ⅲ223は磁器染付。Ⅲ224～Ⅲ226は白磁で、Ⅲ224

出土遺物

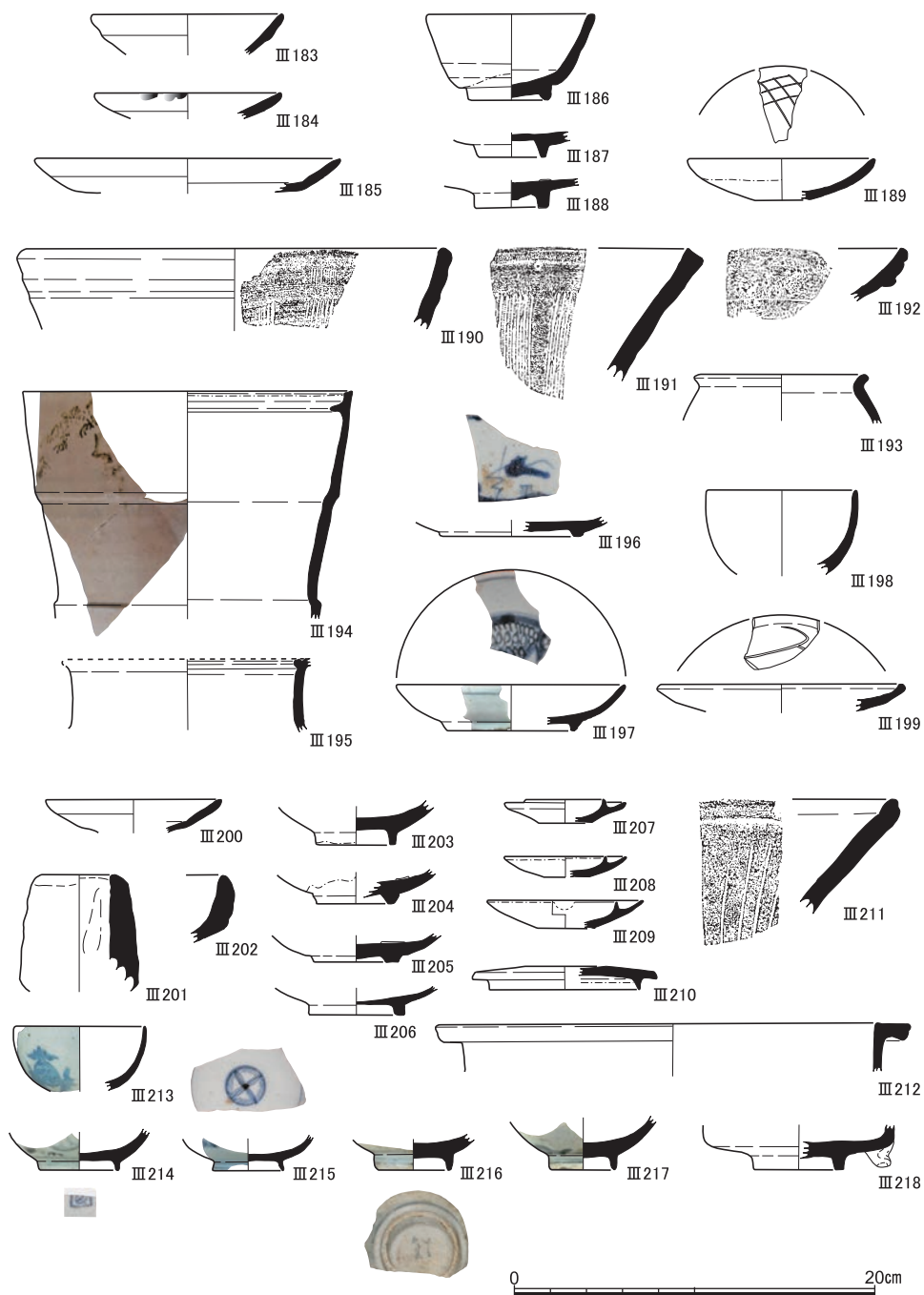


図90 S R 1 南旧盛土出土遺物 (Ⅲ183～Ⅲ185土師器, Ⅲ186～Ⅲ195陶器, Ⅲ196～Ⅲ199磁器), S R 1 南旧盛土出土遺物 (Ⅲ200～Ⅲ202土師器, Ⅲ203～Ⅲ212陶器, Ⅲ213～Ⅲ218磁器)

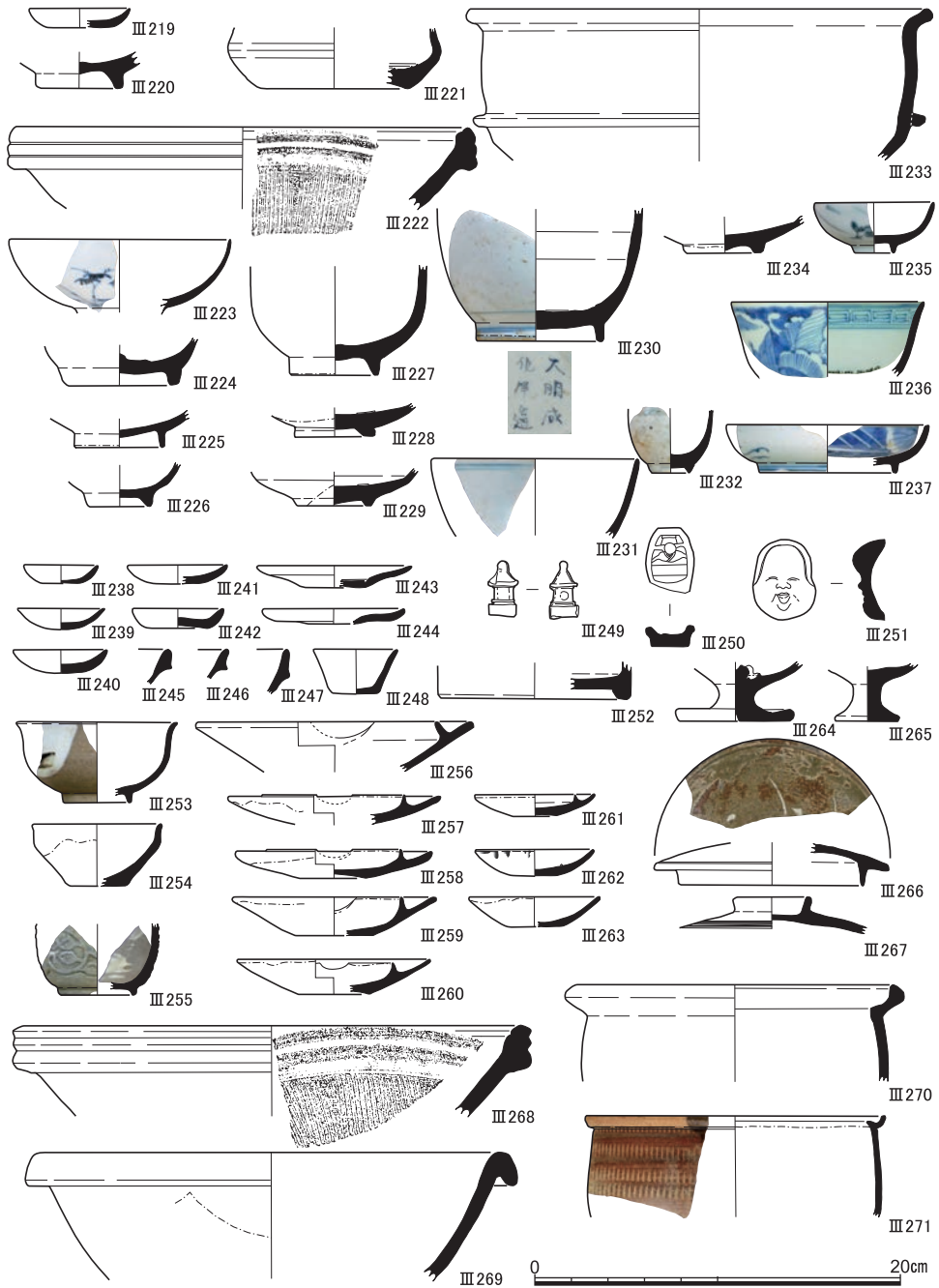


図91 S R 1 埋土出土遺物(1) (Ⅲ 219・Ⅲ 238～Ⅲ 248・Ⅲ 233土師器, Ⅲ 220～Ⅲ 222・Ⅲ 227～Ⅲ 229・Ⅲ 252～Ⅲ 271陶器, Ⅲ 223～Ⅲ 226・Ⅲ 230～Ⅲ 237磁器, Ⅲ 238～Ⅲ 248土師器, Ⅲ 249～Ⅲ 251土製品, Ⅲ 252～Ⅲ 271陶器)

出土遺物

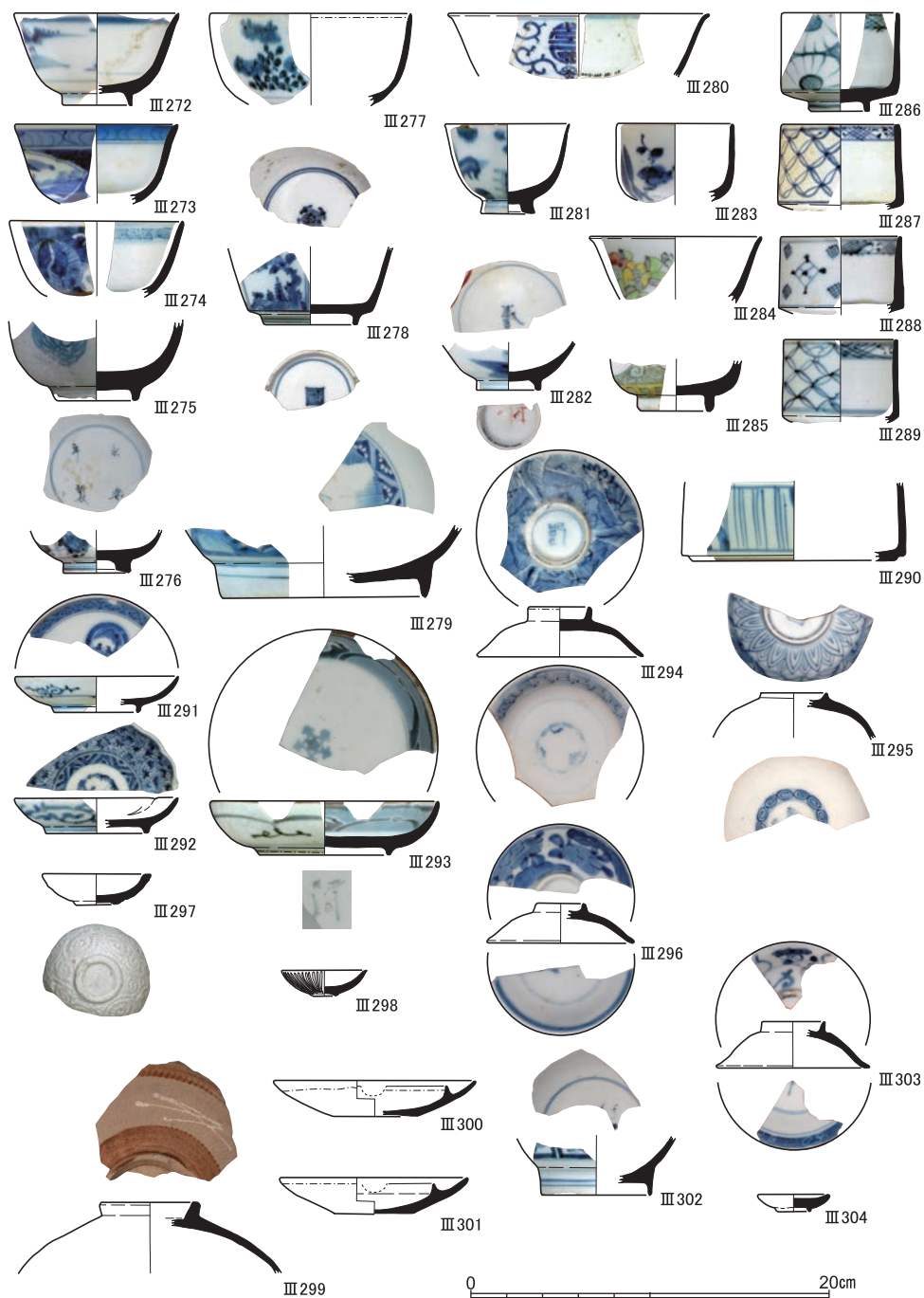


図92 S R 1 埋土出土遺物(2) (III 272～III 298・III 302～III 304磁器, III 299～III 301陶器)

は瓶、Ⅲ225・226は碗の底部。

Ⅲ227～Ⅲ232はS R 1 中層から出土した遺物。Ⅲ227～Ⅲ229は陶器碗。Ⅲ227は呉器手の碗、Ⅲ228・Ⅲ229は唐津焼で、見込み、高台に砂目の目跡をもつ。Ⅲ230～Ⅲ232は磁器染付。Ⅲ230は瓶で底裏に「大明成化年製」の銘をもつ。Ⅲ231は碗、Ⅲ232は小碗ないしは小瓶の類であろう。

Ⅲ233～Ⅲ237はS R 1 の北肩際から出土した遺物。Ⅲ233は球胴の体部に鏝がつく土釜。口縁部が外側へ折れる。外面に、煤が厚く付着する。Ⅲ234は陶器碗。唐津焼。Ⅲ235～Ⅲ237は磁器染付で、Ⅲ235は盃、Ⅲ236は碗、Ⅲ237は皿である。

Ⅲ238～Ⅲ298はS R 1 上層出土。Ⅲ238～Ⅲ244は土師器皿。Ⅲ238・Ⅲ239は内面に、離型材の雲母が残る。Ⅲ243・Ⅲ244は見込みに圈線をもつ。器壁が3mmと薄く、体部が外反する。Ⅲ245～Ⅲ247は土師器焙烙。Ⅲ248は土師器の小型鉢。Ⅲ249・Ⅲ250は玩具。Ⅲ249は土師器のお堂で、型作り。対角線で二等分し、同じ型から2個抜いて接合して成形している。Ⅲ250は軟質施釉陶器の舟に乗る人物。緑釉と透明釉を施す。Ⅲ251は、泥メンコでお多福をかたどった芥子面である。髪の毛部分を彩色している。Ⅲ252は軟質施釉陶器。

Ⅲ253～Ⅲ255は陶器碗。Ⅲ253は内面白化粧、外面も一部白化粧し鉄絵を施す。Ⅲ254は天目釉を掛けている。Ⅲ255は型を用いて、外面に草花文を陽刻している。Ⅲ256～Ⅲ261は陶器灯明受皿、Ⅲ262・Ⅲ263は陶器灯明皿。Ⅲ264は陶器秉燭。底部は回転糸切成形、底面を除いて鉄釉を施す。Ⅲ265は陶器仏飯。底部回転糸切成形。Ⅲ266・Ⅲ267は陶器蓋。Ⅲ266は土瓶、Ⅲ267は鍋の蓋である。Ⅲ268は堺・明石系の陶器すり鉢。Ⅲ269は陶器鉢。Ⅲ270・Ⅲ271は陶器鍋。

Ⅲ272～Ⅲ283・Ⅲ286～Ⅲ289は磁器染付の碗。Ⅲ272・Ⅲ273・Ⅲ280は口縁部端反りとなり、Ⅲ281は口鏽とする。Ⅲ280には焼継がみられる。Ⅲ275の文様はコンニャク印判による。Ⅲ276は見込みに「永楽年製」の銘をもつ。Ⅲ279は蛇ノ目凹形高台である。Ⅲ284・Ⅲ285は磁器色絵の碗。

Ⅲ290は磁器染付段重。Ⅲ291～Ⅲ293は磁器染付皿。Ⅲ292は口縁部を輪花とし、Ⅲ293は口鏽としている。Ⅲ294～Ⅲ296は磁器染付の蓋。Ⅲ294・Ⅲ295は線描きにより、Ⅲ296は線彫りで文様を描いた後、濃みをもちいて、文様を描いている。Ⅲ297・Ⅲ298は白磁紅皿。Ⅲ297は型を用いて蛸唐草文を陽刻している。

Ⅲ299～Ⅲ304はS R 1 上面清掃時に出土した遺物。Ⅲ299は陶器鍋蓋。Ⅲ300・Ⅲ301は陶器灯明受皿。Ⅲ302は磁器染付の広東碗。Ⅲ303は磁器染付の蓋。Ⅲ304は白磁で、口径

4 cm, 器高0.5cmをはかる小型の皿。

S D 3 下層出土遺物 (Ⅲ305～Ⅲ333) Ⅲ305は土師器皿。口縁端部に, 煤が付着する。Ⅲ306は伏見人形の牛。Ⅲ307～Ⅲ310は陶器椀。Ⅲ307は見込みを蛇ノ目釉剥ぎしている。Ⅲ308は胴下部が屈曲する腰折れ形。Ⅲ309は唐津焼で, 見込みと高台に砂目の目跡をもつ。Ⅲ311は陶器灯明受皿。Ⅲ312は陶器灯明皿。Ⅲ313は陶器蓋。Ⅲ314は陶器瓶。Ⅲ315・Ⅲ316は陶器すり鉢。Ⅲ317は鉄釉を施す陶器鍋。

Ⅲ318～Ⅲ326は磁器染付の椀。Ⅲ318は器面の劣化で文様がみえない。Ⅲ323は広東椀で, 見込みに目跡をもつ。Ⅲ327は磁器染付皿。口径18.5cm, 器高4.1cm。見込みを蛇ノ目釉剥ぎしている。Ⅲ328・Ⅲ329は磁器染付の瓶。Ⅲ330は磁器染付仏飯。Ⅲ331は磁器染付蓋。Ⅲ332・Ⅲ333は青磁椀。

S D 3 上層出土遺物 (Ⅲ334～Ⅲ342) Ⅲ334・Ⅲ335は玩具。Ⅲ334は伏見人形で, 獅子形。体部全体を緑, 眉および目をこげ茶で彩色してある。Ⅲ335はミニチュアの土師器蓋。Ⅲ336～Ⅲ341は磁器染付椀。Ⅲ342は磁器染付の蓋物。口縁端部を釉剥ぎしている。

S D 3 上面出土遺物 (Ⅲ343・Ⅲ344) Ⅲ343はミニチュアの玩具。土師器の蓋。Ⅲ344は磁器色絵の椀。口縁部端反り。焼継している。

S D 5 下層出土遺物 (Ⅲ345～Ⅲ348) Ⅲ345は陶器椀。鉄絵で文様を描く。Ⅲ346・Ⅲ347は磁器染付椀。Ⅲ348は磁器染付鉢。

S D 5 上層出土遺物 (Ⅲ349～Ⅲ355) Ⅲ349は陶器灯明受皿。Ⅲ350は陶器鍋。Ⅲ351は陶器すり鉢。Ⅲ352・Ⅲ353は磁器染付椀。Ⅲ354・Ⅲ355は磁器染付蓋。

S D 13 出土遺物 (Ⅲ356・Ⅲ357) Ⅲ356は磁器色絵の広東椀。緑・赤・黒を用いて上絵付けを施す。焼継している。Ⅲ357は陶器仏餉具。

S X 3 出土遺物 (Ⅲ358～Ⅲ371) Ⅲ358は土師器蓋。Ⅲ359は陶器仏餉具。銅緑釉を施している。Ⅲ360は陶器椀。Ⅲ361・Ⅲ362は陶器灯明受皿, Ⅲ363は陶器灯明皿。Ⅲ364は陶器蓋。Ⅲ365は陶器蓋。白化粧後, 鉄絵を施す。Ⅲ366～Ⅲ369は磁器染付椀。Ⅲ360は外面青磁釉を施す染付蓋。Ⅲ371は磁器染付皿。

S X 2 出土遺物 (Ⅲ372～Ⅲ518) Ⅲ372～Ⅲ375は土師器皿で, Ⅲ372・Ⅲ373は見込みに圈線をもつ。Ⅲ374・Ⅲ375は口縁部を花びら形に成形する。Ⅲ376は土師器焙烙。Ⅲ377は小型の土師器鉢。外型作りで, 内面を撫でて仕上げる。Ⅲ378～Ⅲ381は土師質の玩具。Ⅲ378・Ⅲ379はミニチュアの蓋, Ⅲ380は鳩笛, Ⅲ381は伏見人形。

Ⅲ382は鉛製の銃弾で, S X 2 上部から出土した。使用により先端がつぶれている。西

京都大学病院構内A H13区の発掘調査

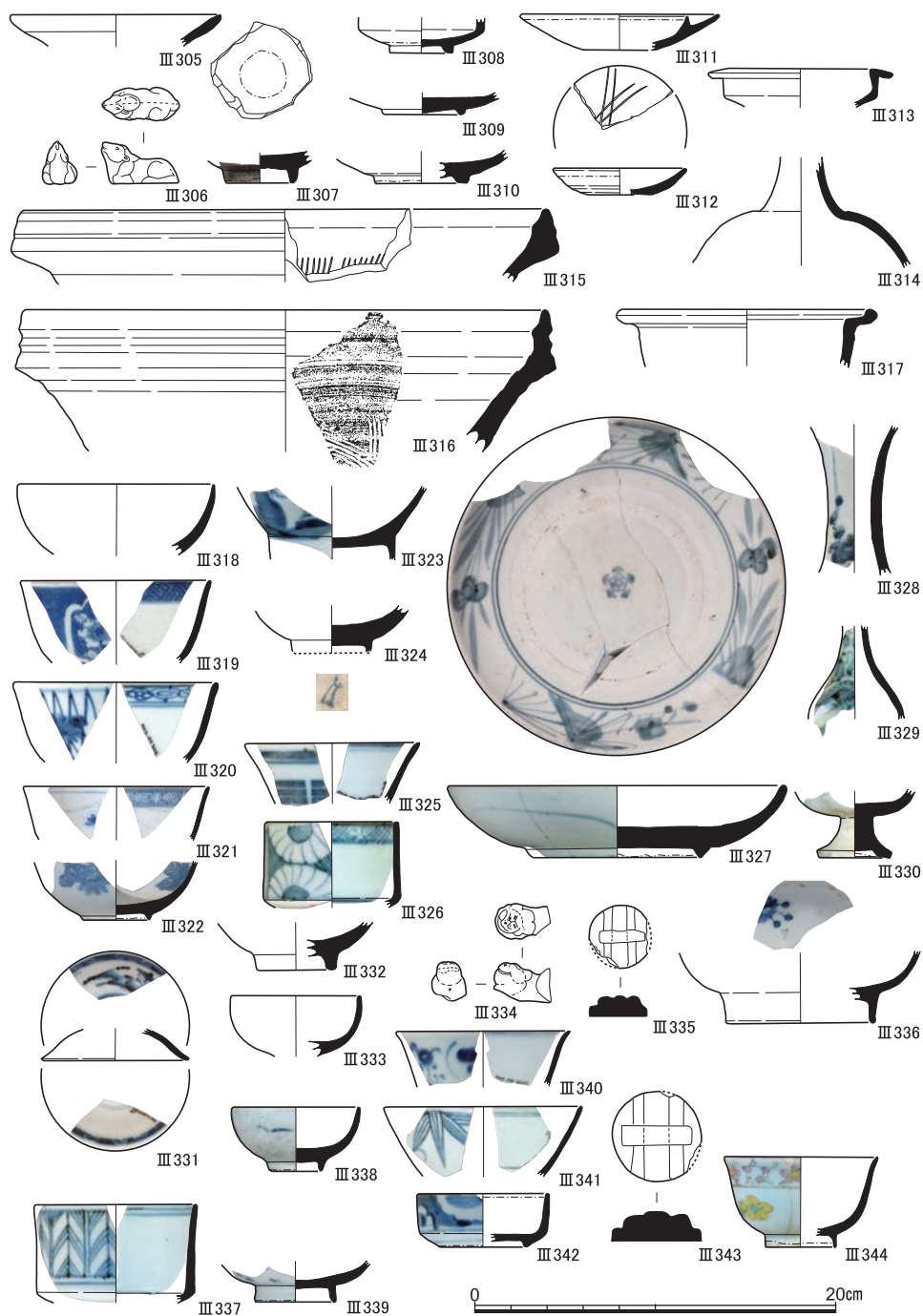


図93 S D 3 上層出土遺物 (Ⅲ305土師器, Ⅲ306土製品, Ⅲ307～Ⅲ317陶器, Ⅲ318～Ⅲ333磁器),
S D 3 上層出土遺物 (Ⅲ334・Ⅲ335土製品, Ⅲ336～Ⅲ342磁器), S D 3 上面出土遺物 (Ⅲ343
土製品, Ⅲ344磁器)

出土遺物

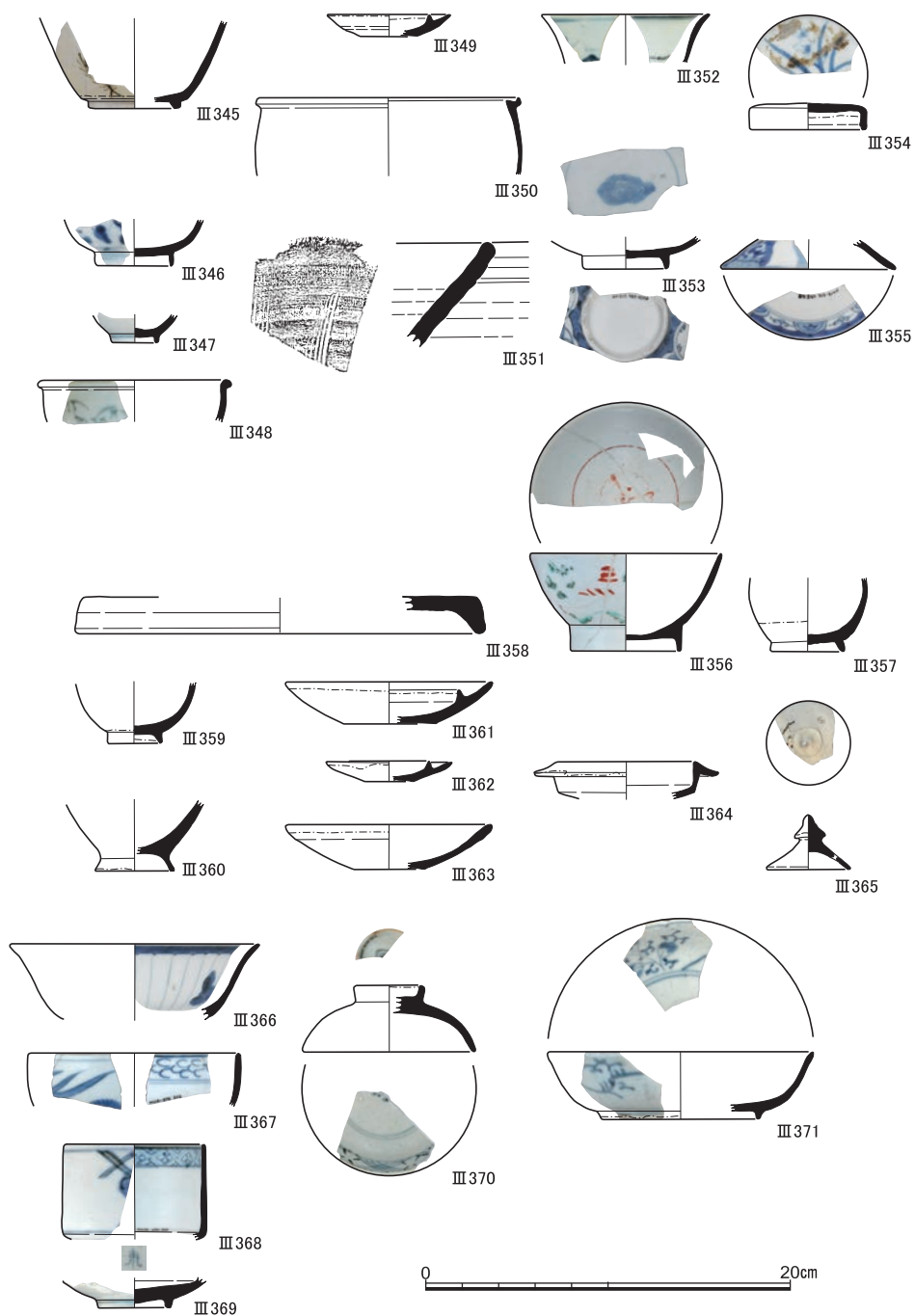


図94 S D 5 下層出土遺物 (Ⅲ345陶器, Ⅲ346～Ⅲ348磁器), S D 5 上層出土遺物 (Ⅲ349～Ⅲ351陶器, Ⅲ352～Ⅲ355磁器), S D 13出土遺物 (Ⅲ356磁器, Ⅲ357陶器), S X 3 出土遺物 (Ⅲ358土師器, Ⅲ359～Ⅲ365陶器, Ⅲ366～Ⅲ371磁器)

に隣接する379地点からも、同類の銃弾が3点出土している〔千葉・長尾2014, p.60〕。幕末にこの地に設置された練兵場に関係する遺物と見てよい。

Ⅲ383～Ⅲ390・Ⅲ403～405は陶器碗。Ⅲ383・Ⅲ388は天目釉を施す。Ⅲ384は煎茶碗で、底裏に「木村」という墨書がみられる。Ⅲ386は高台脇に刻印をもつ。Ⅲ389は見込みに白泥による刷毛文様と鉄絵を施している。Ⅲ390は底裏に「ち」という墨書がみられる。Ⅲ404は肥前京焼風陶器で、底裏に「清水」の銘をもつ。Ⅲ404は雲錦手の色絵陶器で、紅葉を表現した赤は上絵による。底裏に枠囲みの「犬山」の刻印がみられる。Ⅲ405は見込みと高台に砂目の目跡をもつ。

Ⅲ391～Ⅲ400は陶器灯明受皿。Ⅲ401・Ⅲ402は陶器灯明皿。Ⅲ406～Ⅲ415は陶器蓋。Ⅲ416・Ⅲ417は軟質施釉陶器の蓋。Ⅲ417は上面端に、スタンプによる菊花文を13個（うち1個は剥落でみえない）押捺した後に緑釉を施している。Ⅲ418は陶器栓。Ⅲ419は陶器油差しか。Ⅲ420は陶器の瓶。内外面ともに白化粧する。底裏に、「道八」の銘をもつ。Ⅲ421は陶器仏飯。天目釉を施す。Ⅲ422は陶器皿。小判形で見込みに龍文をもつ珉平焼である。Ⅲ423は軟質施釉陶器のコンロ。底部外面に枠囲みで「上製」の刻印をもつ。Ⅲ424～Ⅲ428は陶器すり鉢。いずれも堺・明石系とみられる。Ⅲ429・Ⅲ430は鉄釉を施す陶器鍋。

Ⅲ431は磁器製の戸車。直径5.1cm、高さ1cm、中央の孔の直径1.5cm。側面は使用により摩耗している。

Ⅲ432～Ⅲ481は磁器染付の碗。Ⅲ434・Ⅲ448は色絵染付で、両例とも口縁部内面に四方禪文をもつ。Ⅲ448は焼継がみられる。Ⅲ438・Ⅲ456は型紙刷りで施文している。Ⅲ461・Ⅲ466・Ⅲ471・Ⅲ474は焼継しており、Ⅲ461は底裏に焼継師のマークがみられる。Ⅲ472・Ⅲ473・Ⅲ479は外面に青磁釉を掛けた青磁染付である。Ⅲ475は蛇ノ目凹型高台。

Ⅲ482は菊花形の磁器染付皿。Ⅲ483は磁器染付鉢。Ⅲ484は上絵染付の皿。Ⅲ485～Ⅲ487は磁器染付皿。Ⅲ487は見込みを蛇ノ目釉剥ぎしている。Ⅲ488～Ⅲ490・Ⅲ492～Ⅲ498は磁器染付蓋。Ⅲ488は外面に青磁釉を施している。Ⅲ495は上絵染付である。Ⅲ491は上絵の蓋。口縁端部にも赤で彩色している。Ⅲ499は磁器染付鉢。口縁部が外側に折れ曲がる。Ⅲ500・Ⅲ501は磁器染付瓶。Ⅲ502・Ⅲ503は磁器染付仏飯。

Ⅲ504～Ⅲ505は青磁で、Ⅲ504は皿、Ⅲ505は碗、Ⅲ506は鉢である。Ⅲ504・Ⅲ506は型物で、Ⅲ504は見込み、Ⅲ506は外面に陽刻文様をもつ。Ⅲ507～Ⅲ519は白磁。Ⅲ507は碗、Ⅲ508・Ⅲ509は紅皿、Ⅲ510は蓋。

Ⅲ511～Ⅲ518は砥石。Ⅲ516は菊花の印刻がみられ、別の製品の転用とみられる。Ⅲ518

出土遺物

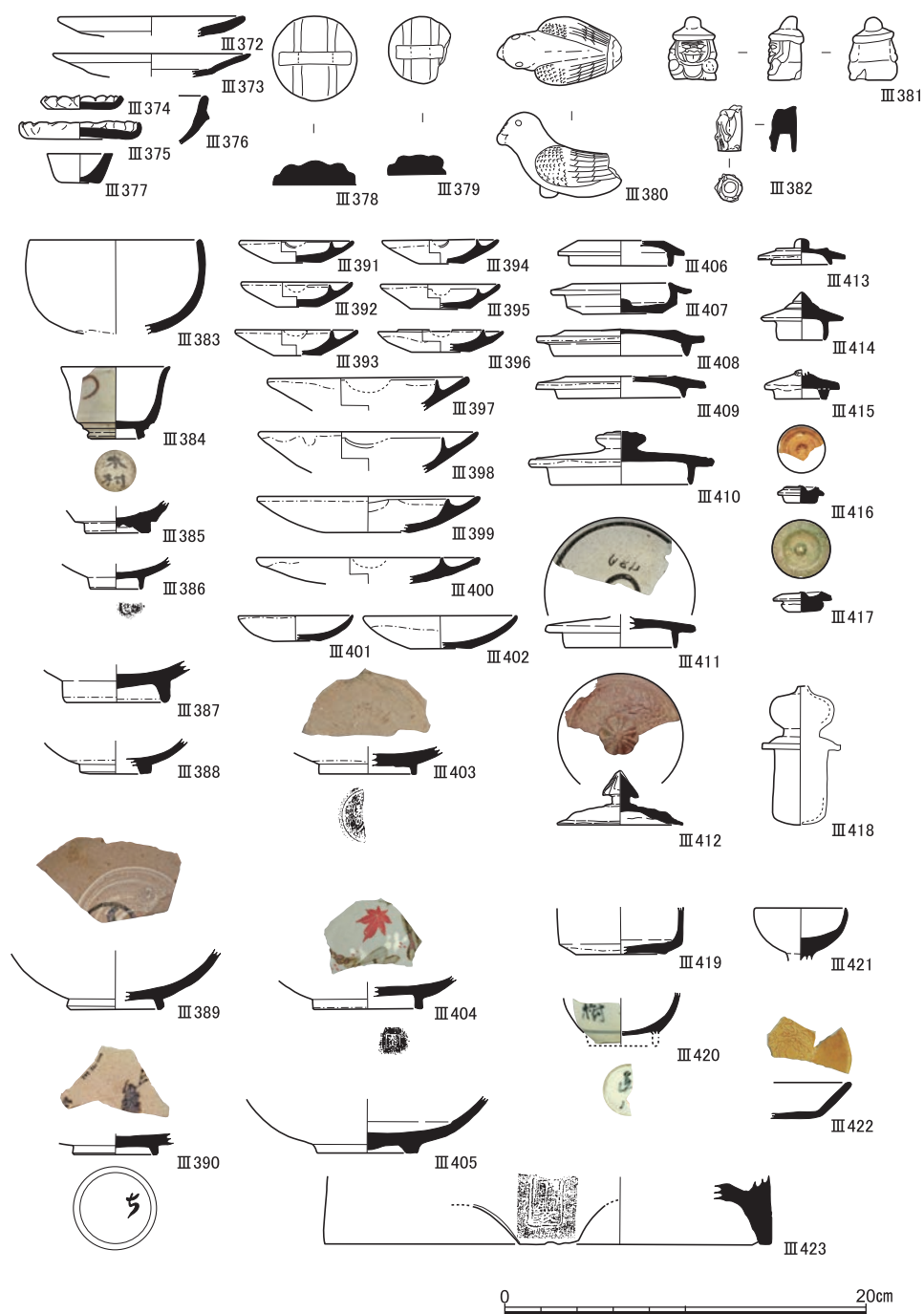


図95 S X 2 出土遺物(1) (Ⅲ372～Ⅲ377土師器, Ⅲ378～Ⅲ381土製品, Ⅲ382銃弾, Ⅲ383～Ⅲ423陶器)

京都大学病院構内A H13区の発掘調査

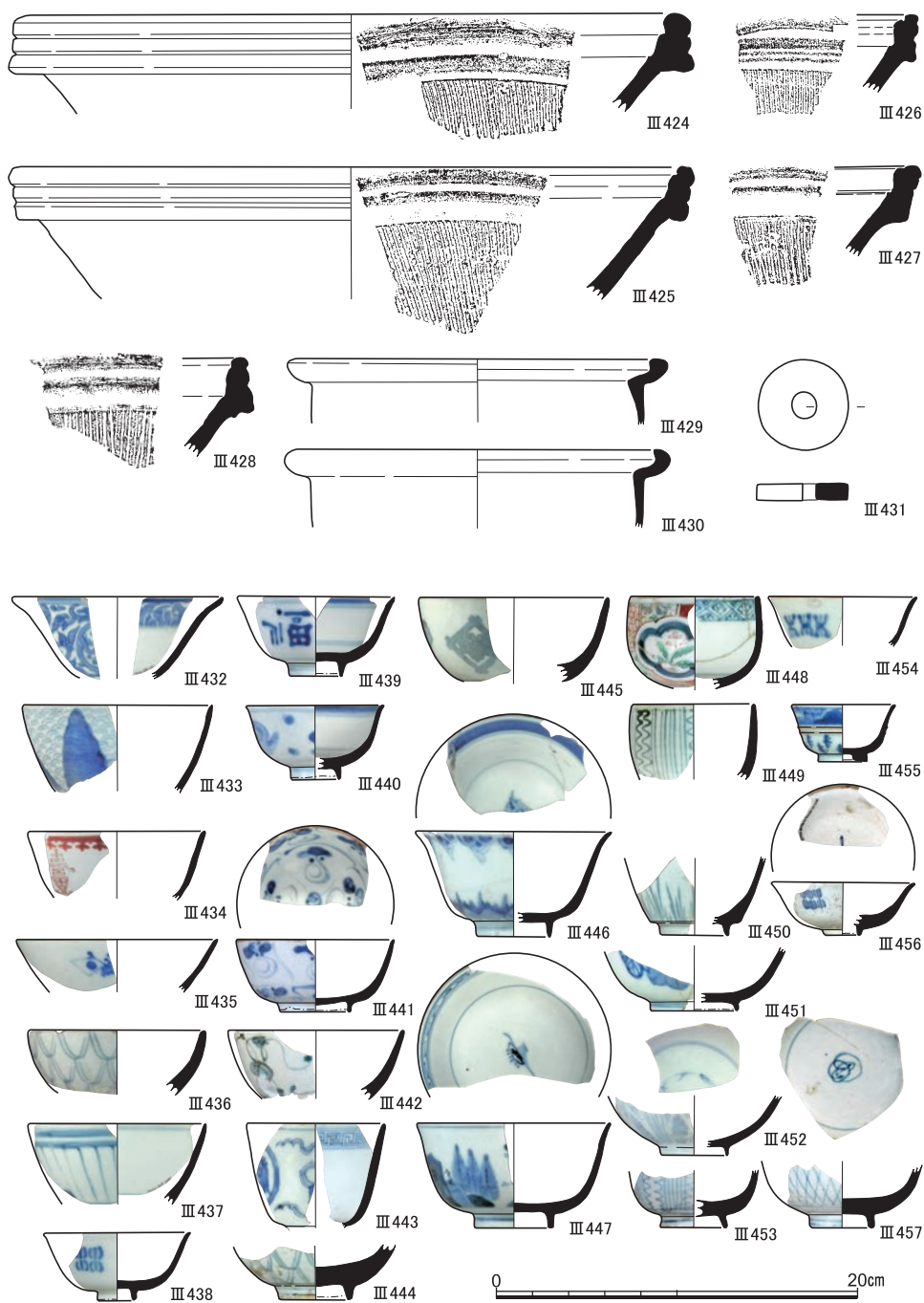


図96 S X 2 出土遺物(2) (Ⅲ424～Ⅲ430陶器, Ⅲ431～Ⅲ457磁器)

出土遺物



図97 S X 2 出土遺物(3) (III 458~III 482磁器)

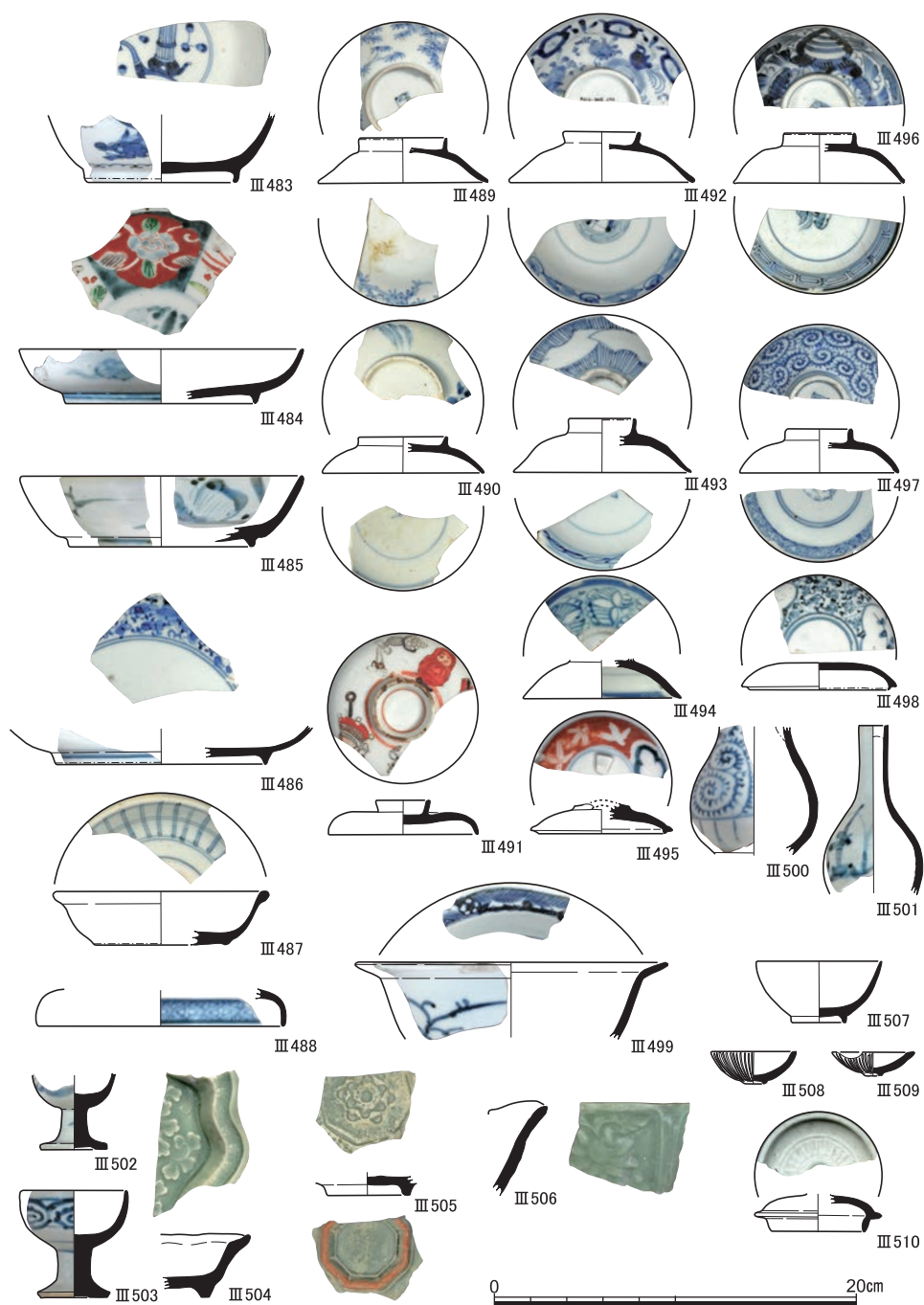


図98 S X 2 出土遺物(4) (III 483~III 510磁器)

出土遺物



図99 S X 2 出土遺物(5) (Ⅲ511～Ⅲ518砥石), S D 1 出土遺物 (Ⅲ519～Ⅲ525磁器), S D 2 出土遺物 (Ⅲ526～Ⅲ529陶器, Ⅲ530磁器)

は粘板岩製。器壁の薄さと両面ともに擦過痕がみられることから、硯の一部であったものを砥石として転用したものであろう。

S D 1 出土遺物（Ⅲ519～Ⅲ525） Ⅲ519～Ⅲ522は磁器染付椀。Ⅲ519・Ⅲ521は口縁部が端反りとなる。Ⅲ523は磁器染付瓶。Ⅲ524は磁器染付の壺。蛸唐草文を施す。Ⅲ525は青磁椀。見込みの花文は型による陽刻である。

S D 2 出土遺物（Ⅲ526～Ⅲ530） Ⅲ526は陶器灯明受皿。Ⅲ527・Ⅲ528は陶器蓋。Ⅲ529は陶器植木鉢。Ⅲ530は磁器染付の椀。

S X 1 出土遺物（Ⅲ531～Ⅲ592） Ⅲ531～Ⅲ533は土師器焙烙。Ⅲ534は瓦器火鉢。Ⅲ535・Ⅲ536は軟質施釉陶器の玩具。Ⅲ535は灯籠，Ⅲ536は椀である。Ⅲ537は窯道具の輪トチン。

Ⅲ538は陶器椀。Ⅲ539は陶器皿。見込みに放射状のヘラ刻みをもつ。高台脇に，小判形の圏線で囲まれた刻印をもつが，文字の判読はできない。Ⅲ540～Ⅲ543は陶器灯明受皿。Ⅲ544～Ⅲ550は陶器灯明皿。Ⅲ551は陶器朱泥急須の蓋。Ⅲ552は陶器蓋。Ⅲ553は陶器*燭。底部は回転糸切り成形。Ⅲ554～Ⅲ556は，堺・明石系の陶器すり鉢。

Ⅲ557～Ⅲ571は磁器染付椀。Ⅲ565・Ⅲ557～Ⅲ559・Ⅲ561・Ⅲ562は口縁部を端反りとする。Ⅲ567・Ⅲ568は広東椀。Ⅲ569は底裏に「玩玉」の銘をもつ。Ⅲ570は蛇ノ目凹型高台。Ⅲ572は磁器染付の瓶。底裏に「亀亭」の銘をもつ。「亀亭」は京都五条坂の窯元・和氣亀亭が用いた銘である。Ⅲ573～Ⅲ580は磁器染付蓋。Ⅲ573は焼継している。Ⅲ581は青磁香炉。

Ⅲ582～Ⅲ585は石製の硯。いずれも長方形の形態を呈する。Ⅲ586～Ⅲ592は砥石。Ⅲ591は粘板岩製で，両面とも摩耗している。硯を転用した砥石であろうか。

S K 2 出土遺物（Ⅲ593） Ⅲ593は磁器製の玩具人形。鉄絵で，顔や髪の毛を表現している。

S E 1 出土遺物（Ⅲ594） Ⅲ594は砥石。

砂礫（第7層）出土遺物（Ⅲ595～Ⅲ599） Ⅲ595・Ⅲ596は中世の土師器で，1段撫で素緑。Ⅲ597は陶器水指。蓋を受けるため，口縁部内面が突出する。Ⅲ598・Ⅲ599は中世の白磁。

灰褐色砂質土（第6層）出土遺物（Ⅲ600） Ⅲ600は陶器唐津焼の皿。

淡褐色土（第5層）出土遺物（Ⅲ601～Ⅲ644） Ⅲ601～Ⅲ612は土師器皿。このうち，Ⅲ601は中世に遡るが，そのほかは17世紀後半～18世紀前半におさまる。Ⅲ613は土師器鉢。

出土遺物

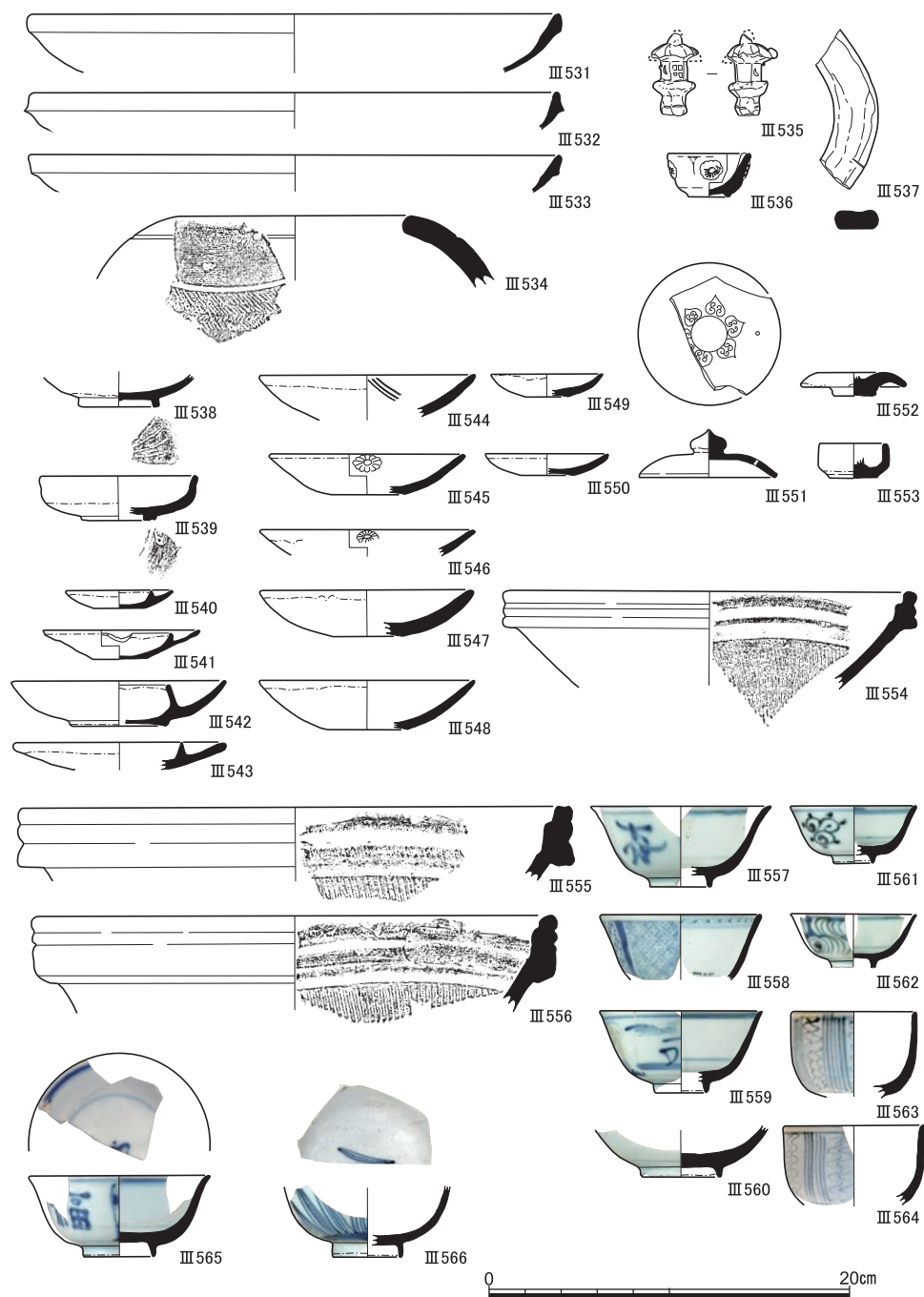


図100 S X 1 出土遺物(1) (Ⅲ531～Ⅲ533土師器, Ⅲ534瓦器, Ⅲ535・Ⅲ536土製品, Ⅲ537窯道具, Ⅲ538～Ⅲ556陶器, Ⅲ557～Ⅲ566磁器)

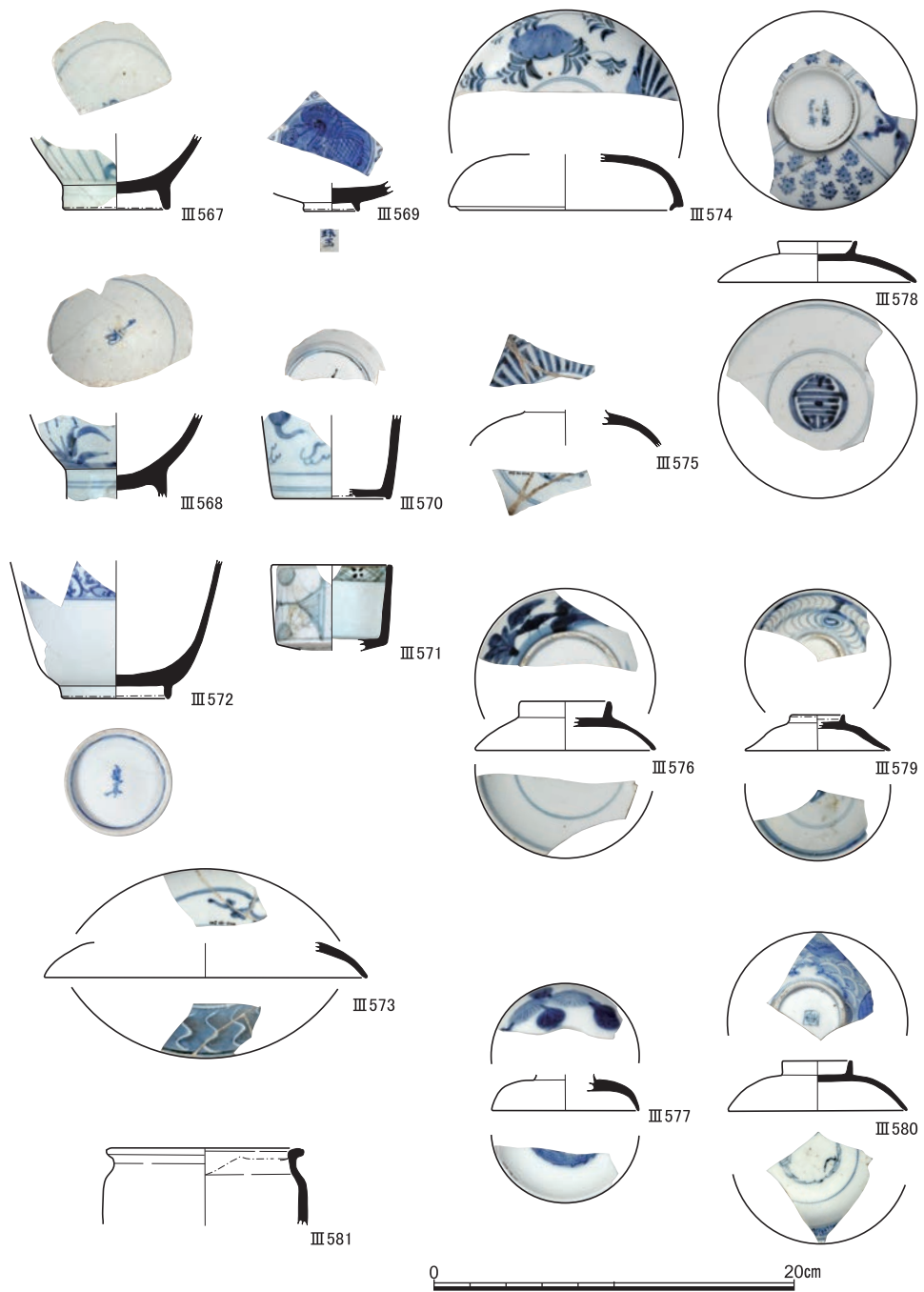


図101 S X 1 出土遺物(2) (III 567～III 581磁器)

出土遺物

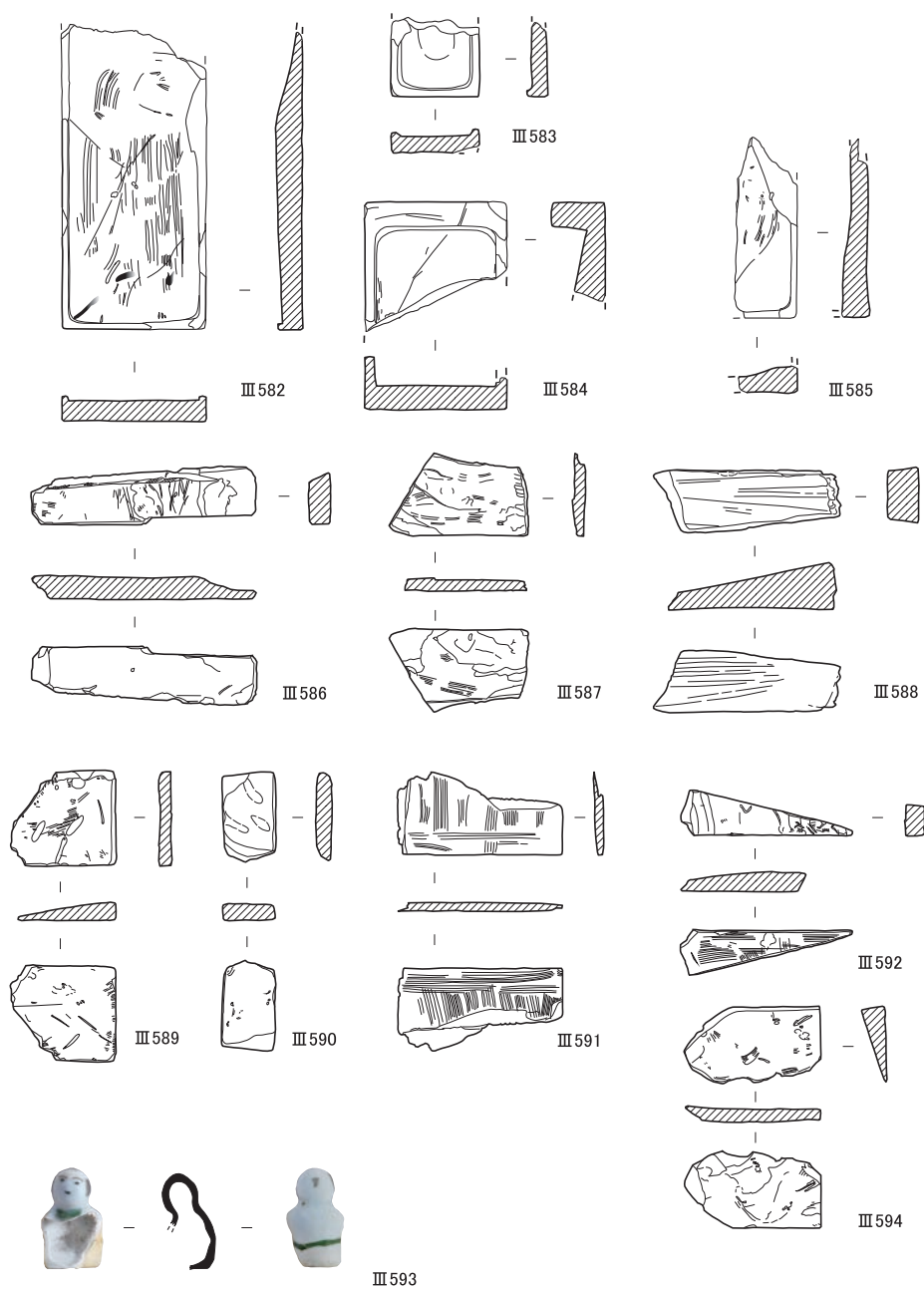


図102 S X 1 出土遺物(3) (Ⅲ582～Ⅲ585硯, Ⅲ586～Ⅲ592砥石), S K 2 出土遺物 (Ⅲ593磁器人形), S E 1 出土遺物 (Ⅲ594砥石)

外面は粘土紐の接合痕跡を残し、内面は撫でて仕上げている。中世（13世紀代）の遺物であろう。Ⅲ614も中世に遡る瓦器羽釜。Ⅲ615・Ⅲ616は瓦器火入れ。Ⅲ615は、口縁部が受口となり、口縁部よりやや下がった位置に、径1.6cmの小孔があく。

Ⅲ617～Ⅲ631は陶器の椀ないし皿。Ⅲ632～Ⅲ634は陶器すり鉢。Ⅲ635は陶器植木鉢。Ⅲ636～Ⅲ638は磁器染付椀。Ⅲ638は底裏に「大明」の銘をもつ。Ⅲ639は磁器染付の皿、Ⅲ640は磁器染付の鉢。Ⅲ641・Ⅲ642は青磁椀。Ⅲ643・Ⅲ644は白磁で、Ⅲ643は椀、Ⅲ644は皿。ともに中世前半期の遺物である。

淡褐色土上面出土遺物（Ⅲ645～Ⅲ648） Ⅲ645は東播系の須恵器鉢、Ⅲ646は口縁部を玉縁とする白磁椀。いずれも中世前半期の遺物。Ⅲ647は小判形をした土製品。片面に、文字などを型押しで陽刻している。玩具であろう。Ⅲ648はキセル。

灰褐色土（第4層）出土遺物（Ⅲ649～Ⅲ651） Ⅲ649・Ⅲ650は伏見人形。Ⅲ649は褐色を呈する胎土、Ⅲ650は灰白色を呈する胎土を用いる。Ⅲ651は軟質施釉陶器の鬚水入れ。

灰褐色土上面出土遺物（Ⅲ652・Ⅲ653） Ⅲ652は窯道具の輪トチン。Ⅲ653は陶器土瓶の底部で、底裏に「音羽」とみられる刻印がみえる。

黒褐色土（第3層）出土遺物（Ⅲ654～Ⅲ676） Ⅲ654～Ⅲ656は焼塩壺の蓋。いずれも、内面に布目の痕跡を残す。Ⅲ657～Ⅲ663は玩具。Ⅲ657・Ⅲ658はミニチュア羽釜で、体部を外型で製作した後、鐳を貼り付けている。Ⅲ659はミニチュア竈。Ⅲ660はミニチュア灯籠。Ⅲ661は鳩笛。Ⅲ662・Ⅲ663は伏見人形。

Ⅲ664は陶器椀。底裏に「京」の刻印をもつ。Ⅲ665は陶器灯明受皿、Ⅲ666は陶器灯明皿。Ⅲ667は陶器皿。Ⅲ668は蓋物の蓋。Ⅲ669は土瓶の蓋で、内面に「寶山」の刻印をもつ。Ⅲ670は磁器染付椀。外面には青磁釉を掛ける。Ⅲ671・Ⅲ672は磁器染付の皿。Ⅲ671は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする。Ⅲ673・Ⅲ674は石製硯。Ⅲ675・Ⅲ676は砥石。

瓦類（Ⅲ677～Ⅲ690） Ⅲ677は単弁八葉の蓮華文軒丸瓦。表土出土。弁を凸線で囲み、弁間に珠文を配している。Ⅲ678は蓮華文軒丸瓦。S F 3出土。Ⅲ679は巴文軒丸瓦。巴文の外側に珠文を配する。S D 27出土。Ⅲ680は唐草文軒平瓦。表土出土。以上は、平安後期～鎌倉前期に比定されよう。

Ⅲ681～Ⅲ685は近世～近代の瓦で、刻印をもつもの。Ⅲ681は○囲みに「十」、Ⅲ681は□囲みに「甚」、Ⅲ683は○囲みに「市」、Ⅲ684は□囲みに「二区 六九号」、Ⅲ685は□囲みに「二区 一〇八号」の刻印をもつ。

出土遺物

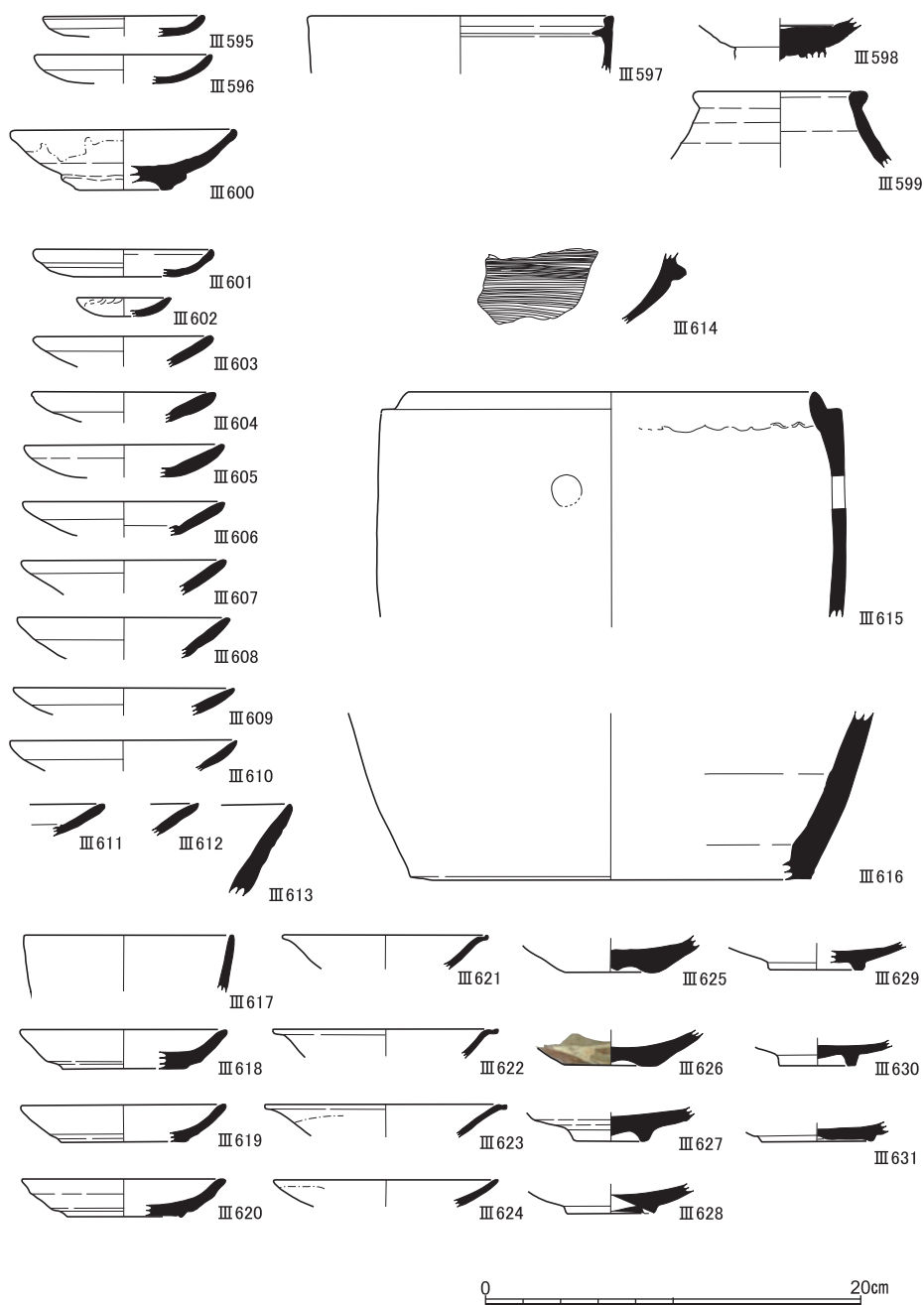


図103 砂礫出土遺物 (Ⅲ595・Ⅲ596土師器, Ⅲ597陶器, Ⅲ598・Ⅲ599磁器), 灰褐色砂質土出土遺物 (Ⅲ600陶器), 淡褐色土出土遺物(1) (Ⅲ601～Ⅲ613土師器, Ⅲ614～Ⅲ616瓦器, Ⅲ617～Ⅲ631陶器)

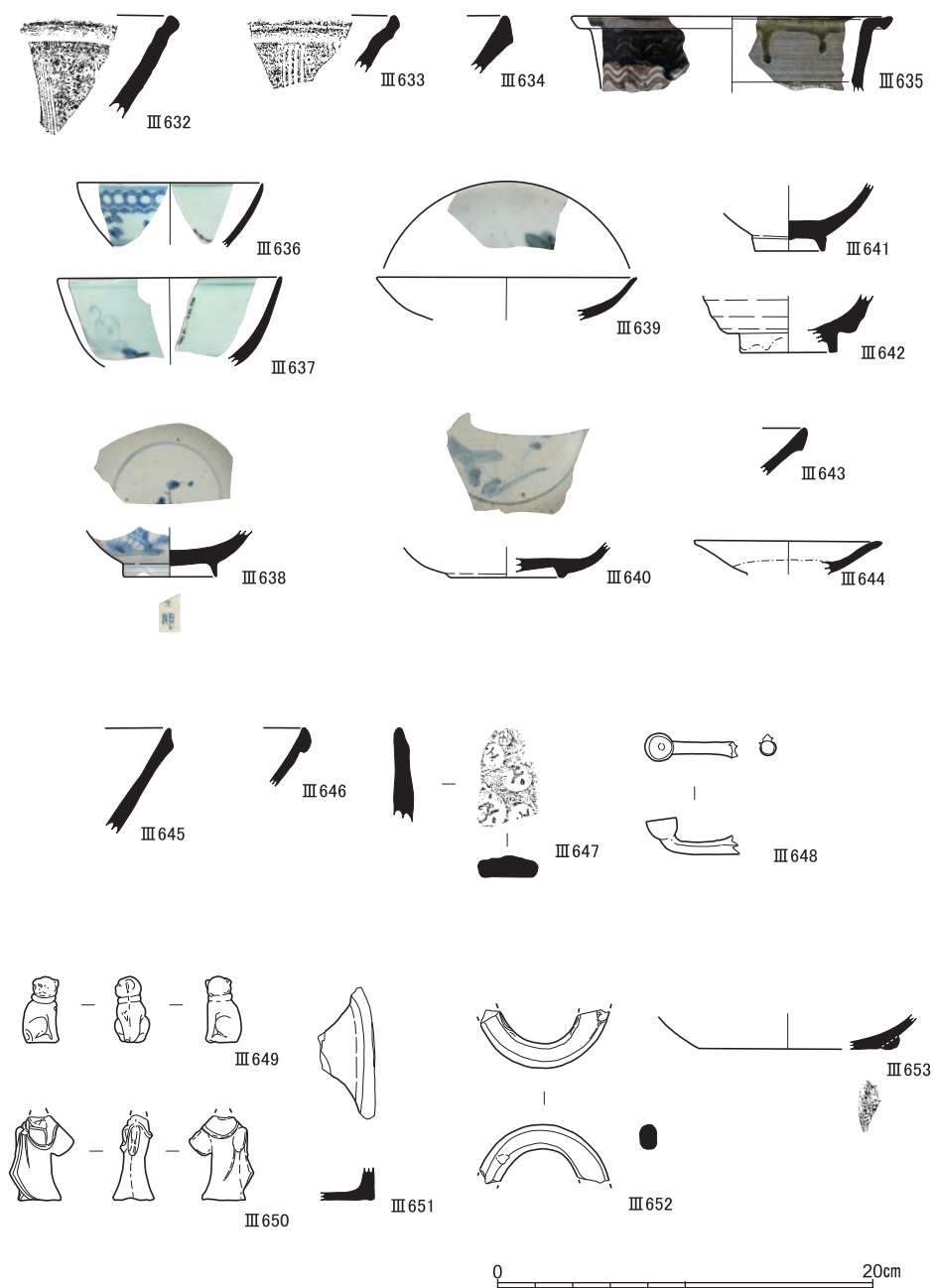


図104 淡褐色土出土遺物(2) (Ⅲ632～Ⅲ635陶器, Ⅲ636～Ⅲ644磁器), 淡褐色土上面出土遺物 (Ⅲ645須恵器, Ⅲ646磁器, Ⅲ647土製品, Ⅲ648煙管), 灰褐色土出土遺物 (Ⅲ649・Ⅲ650土製品, Ⅲ651軟質施釉陶器), 灰褐色土上面出土遺物 (Ⅲ652窯道具, Ⅲ653陶器)

出土遺物

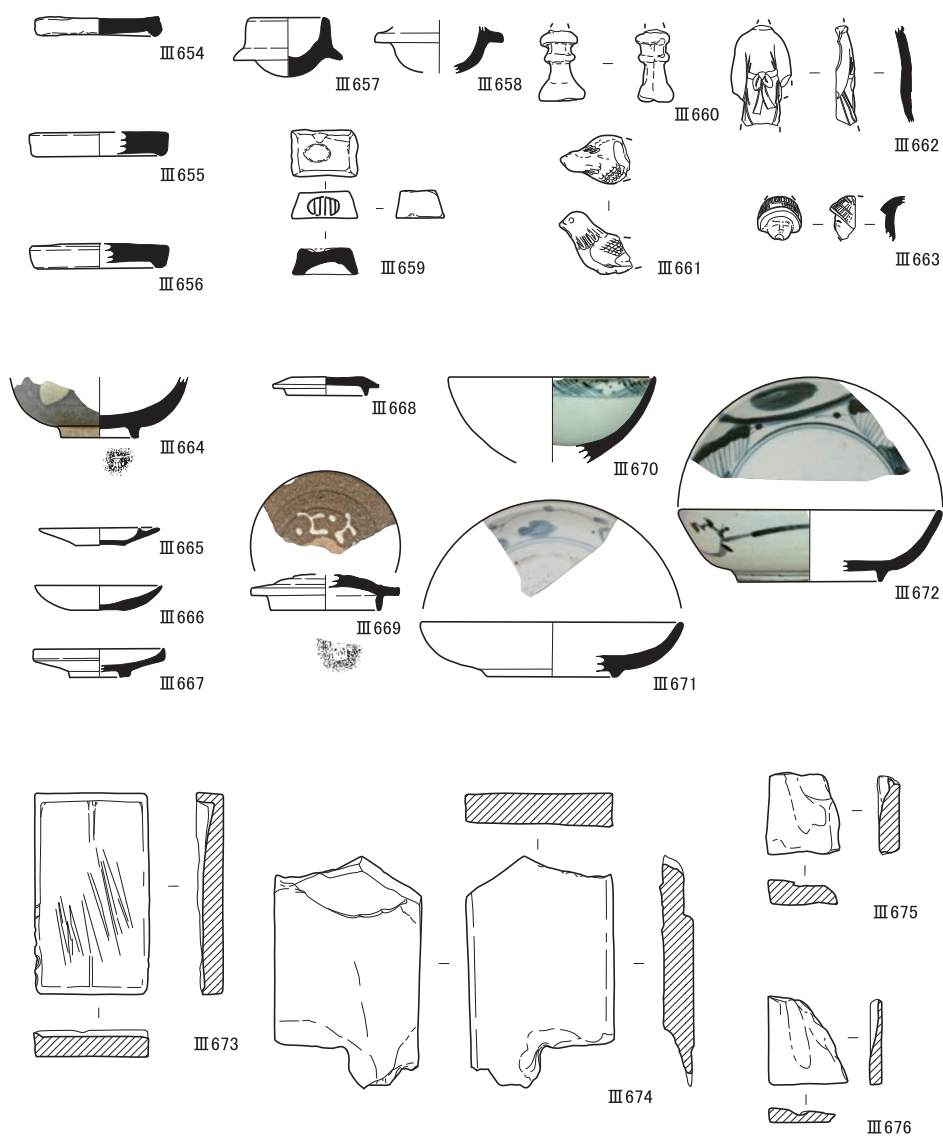


図105 黒褐色土出土遺物（Ⅲ654～Ⅲ656土師器，Ⅲ657～Ⅲ663土製品，Ⅲ664～Ⅲ669陶器。Ⅲ670～Ⅲ672磁器，Ⅲ673・Ⅲ674硯，Ⅲ675・Ⅲ676砥石）

Ⅲ686～Ⅲ690は井戸S E 1の井筒に用いられていた井戸瓦。法量は、長辺28.5～30cm、短辺25～27cm、厚さ3cm前後。凸面に楔形の刻みをⅢ686は4段、Ⅲ687は3段いれている。Ⅲ688・Ⅲ689は両側面に、各2個ずつ長方形の穴をあけている。

泥面子（Ⅲ691～Ⅲ768） 遺構および包含層から出土した泥面子を一括して示した。面打（めんちょう）と呼称されるもので、上面に型押しにより文様を施している。文様には、文字・家紋・動物・将棋の駒などがあり、多様である。上面形が円形を呈するものがほとんどであるが、Ⅲ756・Ⅲ757のように六角形となるものもある。円形のものの径は、小は1.7cm（Ⅲ755）、大は5.7cm（Ⅲ767）をはかるが、主体を占めるのは2.5～3cmのものである。

土製品（Ⅲ769・Ⅲ770） 小判形の土製品で、片面に型押しで「銀」（Ⅲ769）、「寶」（Ⅲ770）といった文字を陽刻している。

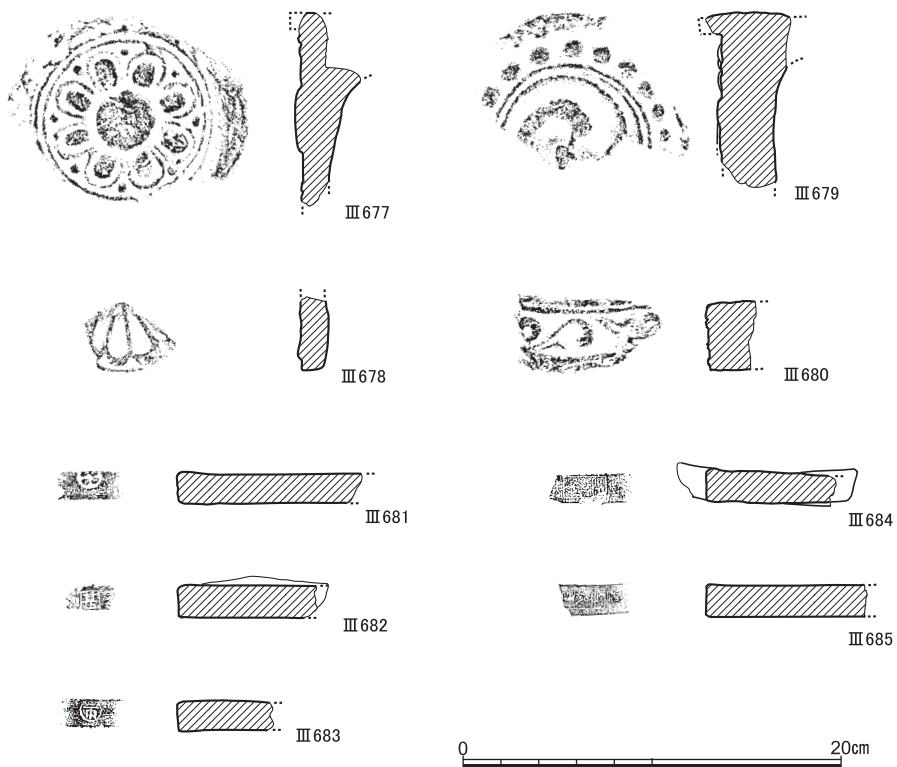


図106 瓦類(1)（Ⅲ677～Ⅲ679軒丸瓦，Ⅲ680軒平瓦，Ⅲ681～Ⅲ685刻印瓦）

出土遺物

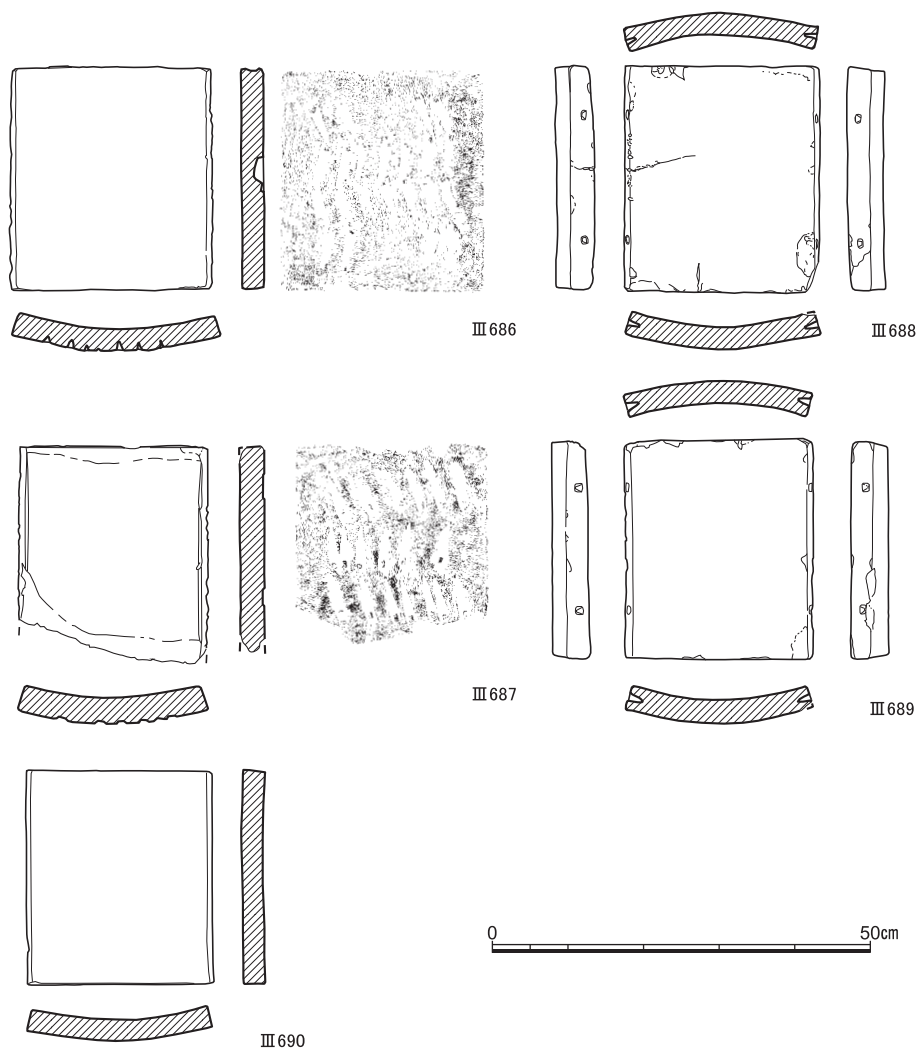


図107 瓦類(2) (Ⅲ686～Ⅲ690 S E 1 井戸瓦)

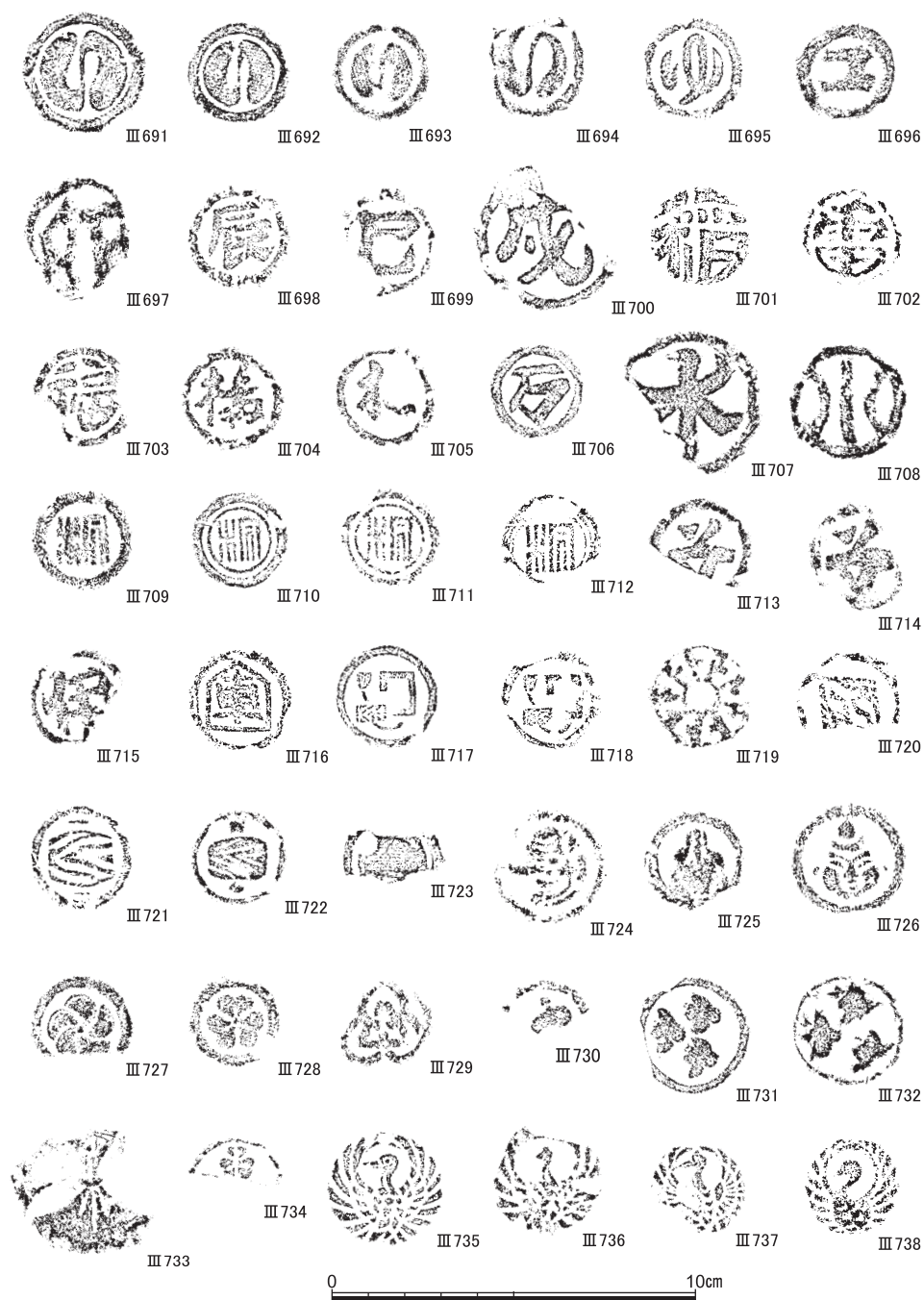


図108 土製品(1) (III 691～III 738泥面子)

出土遺物

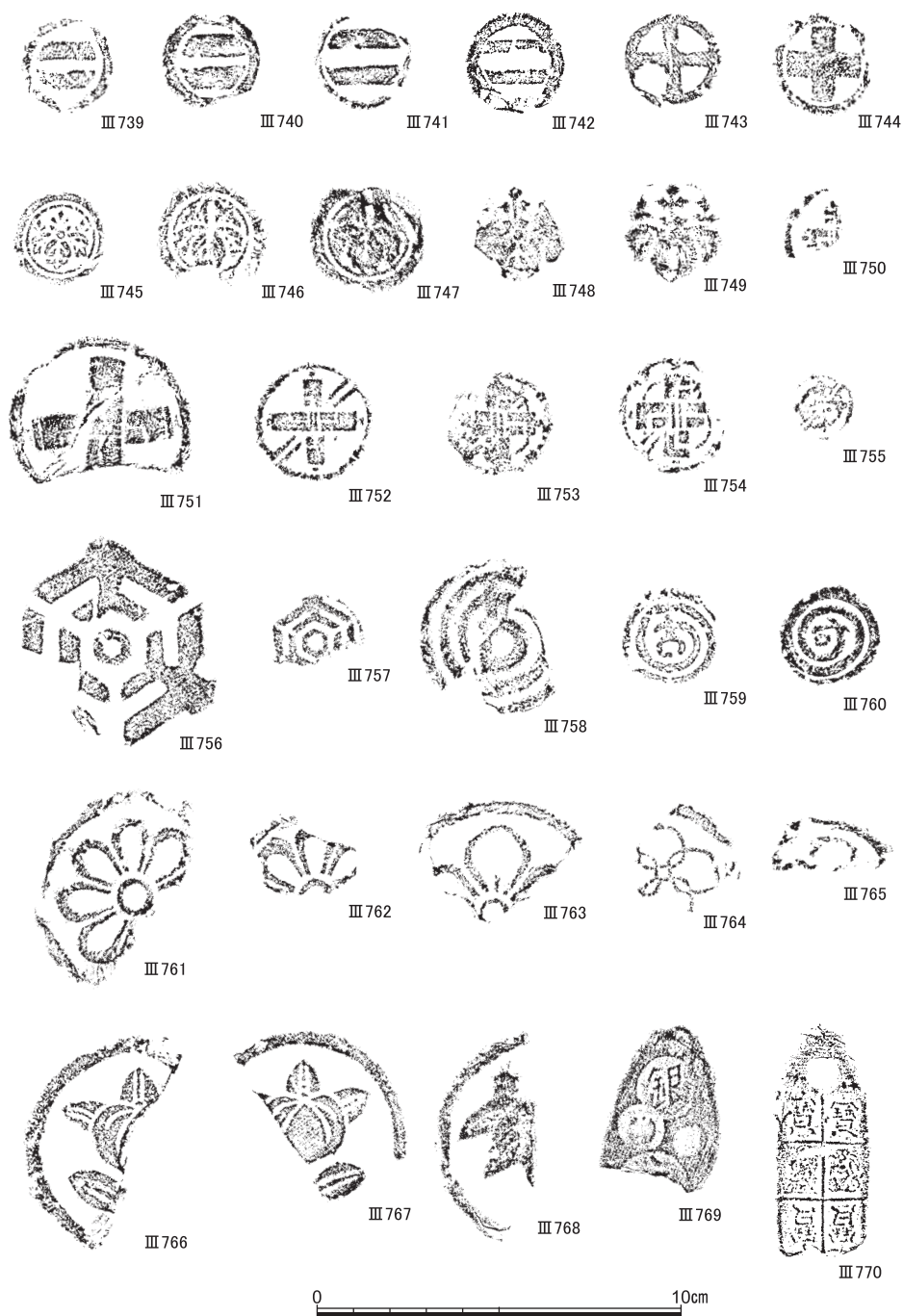


図109 土製品(2) (Ⅲ739～Ⅲ768泥面子, Ⅲ769・Ⅲ770玩具)

5 小 結

本調査区の主要な課題は、西に隣接する379地点で検出された水路・道路が東側へどのように展開しているかを明らかにすることにあった。調査の結果、前回の調査では、攪乱等で残存状態のよくなかった東西部分の水路・道路を比較的良好な状態で検出することができ、その構造や変遷をとらえることができた。この結果、つぎの点が明らかになった。

17世紀前半、聖護院村と吉田村を画する道路が水路に先行して設置された。S F 2-2とS F 3とした遺構がこれにあたる。ともに礫敷で側溝をもつが、この2つの道路の先後関係は、年代の比定できる遺物が出土していないため、はっきりしない。S F 3の上部に水路が構築されていること、S F 2-1が水路とともに機能していることから判断すれば、S F 3→S F 2-2という想定が自然であるが、結論は保留する。

17世紀後半、水路S R 1が構築される。北側の盛土（護岸）はS F 3を基盤にし、南側は、この地一帯の基盤層である砂礫を掘り凹め礫を集積して、盛土（護岸）の基盤としていいる。構築当初の水路の幅は、2.5～3 m前後である。この水路とともに当初機能したのが道路S F 2-1であるが、18世紀中頃までには廃絶し、村境の道路はS R 1の北側盛土の上面に移動する（S F 1）。そして水路は、19世紀中葉の遺物を多量に含む洪水性堆積物によって埋積しその役割を終えている。以上のような成果は、前回の調査成果を補強するものであり、村境のありようを知るうえで重要な知見となった。

もう一つ、今回の調査で新たに判明した成果として、S X 1・S X 2とした集石および砂礫土の存在があげられる。S X 1はS X 2を切っており、時間的には新しいが、ともに幕末頃の遺物を多量に含んでおり、それほどの時間差は認められない。S X 2は3層に細分できるが、その最下層（2 c層）はS R 1を埋積した洪水性堆積物の溢流であり、その上部を覆う2 a・2 b層は、この付近全体を地均しするための整地土と推定できる。S X 1も整地のための集石である可能性が高い。これらは、出土遺物から判断して、幕末にこの地に設置された練兵場に関連するものであろう。さらに、この地に練兵場が設置された理由の一つとして、度重なる洪水による荒蕪地化を掲げたが〔千葉・長尾2014〕、S X 1・S X 2は、そうした想定を支持する証拠になるかもしれない。

現地調査と整理作業は千葉豊が担当し、長尾玲が補佐した。測量や出土資料の整理などにあたっては、河野葵・西田陽子・上阪航・空佐和子・高野紗奈江・馬兆中の助力を得た。